

特46-74



1200500893155

特46

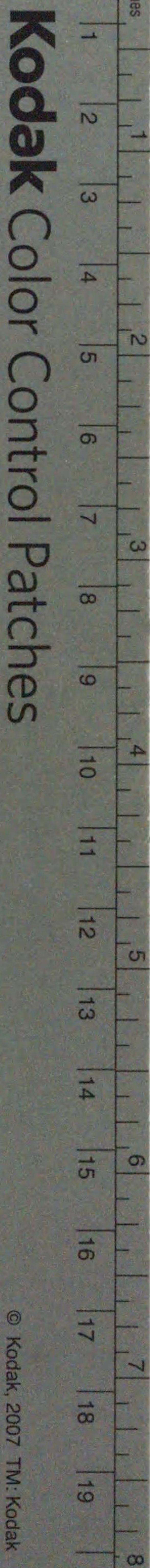
74

少年教育

修身はなし

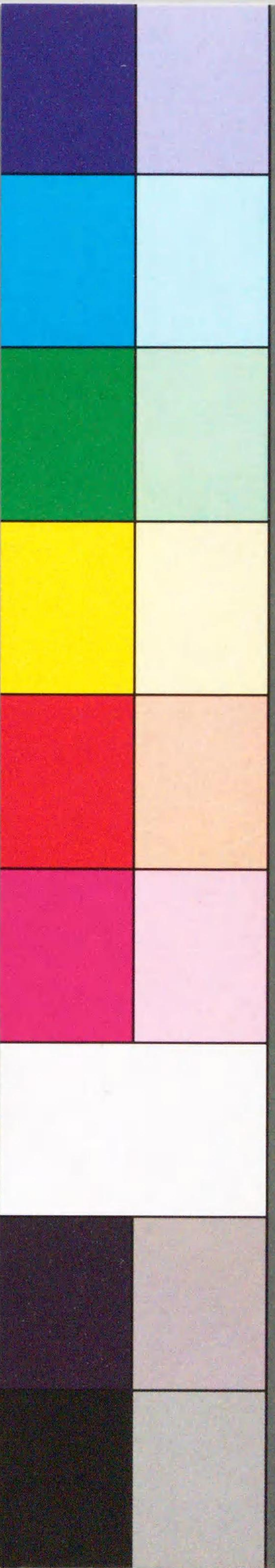
修身之巻

国立国会図書館



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

文通家主人編

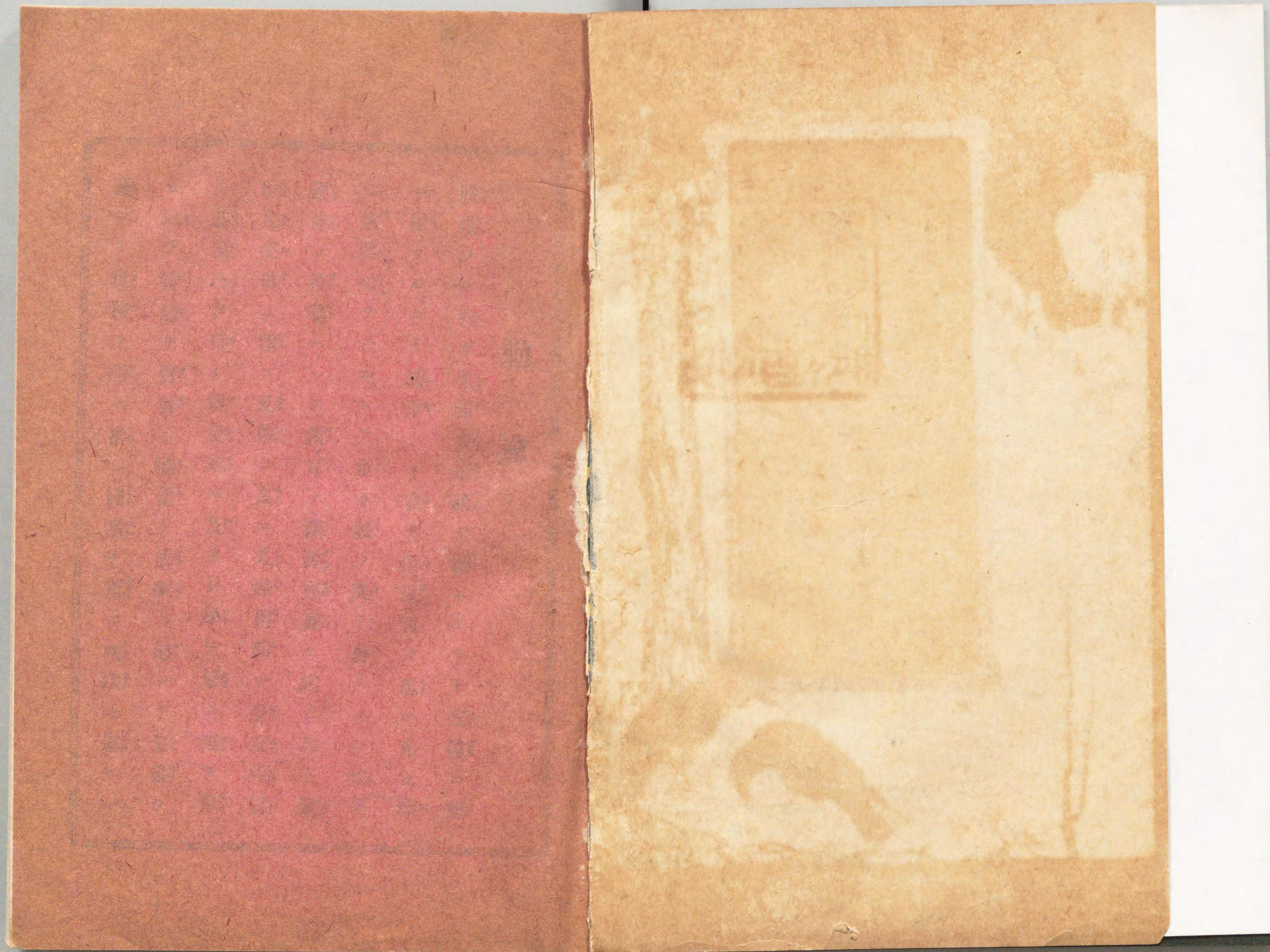
少年教育

修身はなし

修身之卷

265
657

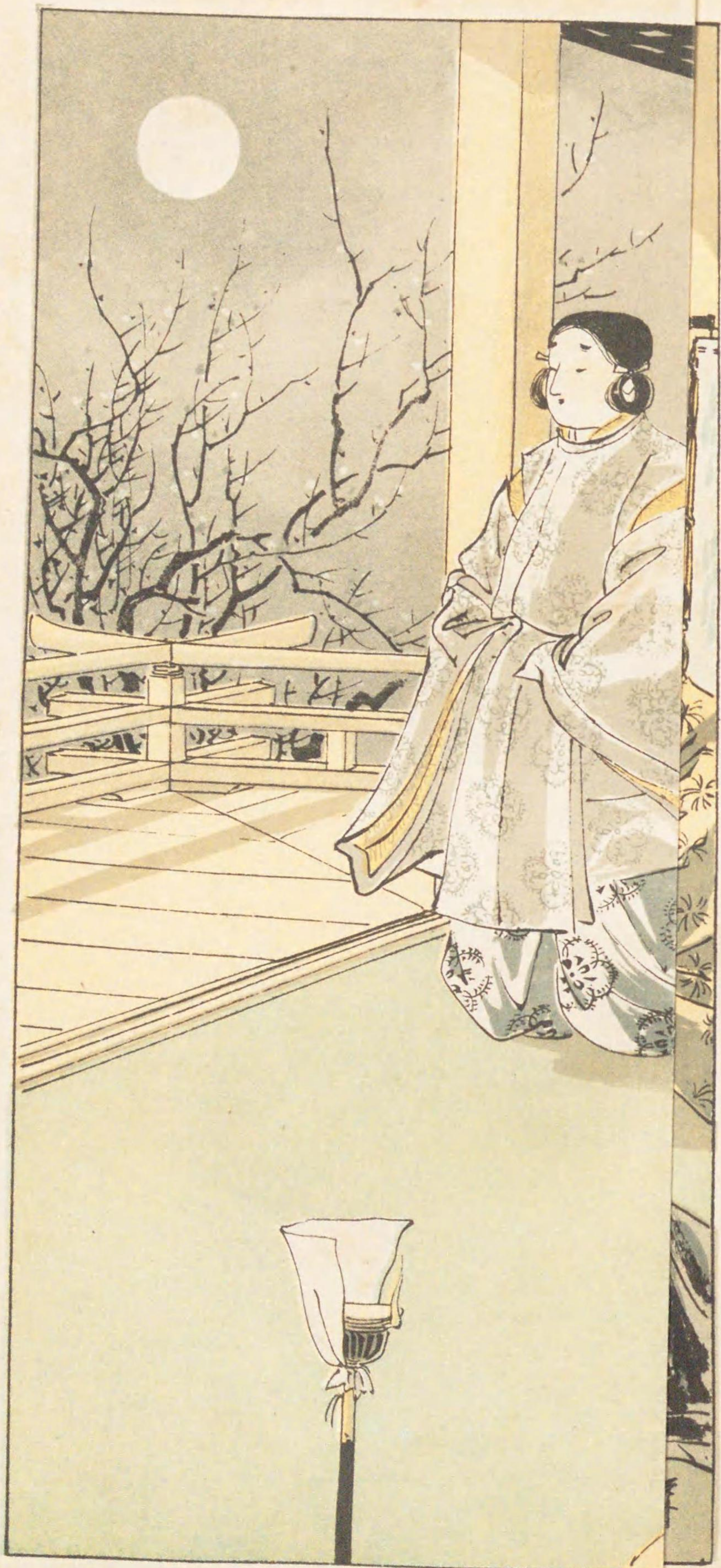




勅諭

朕惟我皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳
 ナ樹ツルコト上深厚ナリ我が臣民克ク忠ニ克ク孝
 ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此
 國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾
 臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相
 シ恭儉己ヲ持シ博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習
 ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進ンデ公益ヲ
 廣メテ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一





御名御璽

且た緩くわん急きよアレバ義ぎ勇ゆう公こうニ奉ほうジ以もテ天てん壤じやう無む窮きゆうノ皇かう運うん
 ナ扶よ翼よくスベシ是こノ如ごとキハ獨ひとリ朕ちんガ忠ちゆう良りやうノ臣しん民みん々
 ルノミナラズ又また以もテ爾なんぢ祖そ先せんノ遺ゆ風ふうヲ顯けん彰しやうスルニ
 足たラん斯こノ道みちハ實じつニ我わガ皇かう祖そ皇かう宗そうノ遺ゆ訓くんニシテ
 子し孫そん臣しん民みんノ俱ともニ遵じゆん守しゆスベキ所ところ之これヲ古こ今こんニ通つうジテ
 謬まがラズ之これ中ちゆう外がいニ施ほシテ悖へいラズ朕ちん爾なんぢ臣しん民みんト俱ともニ
 拳けん々々服ふく膺ようシテ威い其その德とくヲ一ひとニセンコトヲ庶ね幾かフ



御名御璽

少年修身ばなし

目次

- 加藤清正の話
- 林羅山の勉學
- コロンブス亞米利加發見
- 名取彦兵衛の熱心
- 孟母三遷の教
- 大工健造の勉勵
- 日本武尊の武勇
- 牛董の學問
- 若林善内の善孝
- 惺々曉齋の話
- 綾部剛立の熱心

- 伊能忠敬の測量
- 雪舟畫を好む
- 大石良雄の頓智
- 徳を以て怨を報ず
- 兼山國益を計る
- 平田篤胤と蒲生君平
- ミルレルの止酒
- 桑原平七の慈善
- 勝海舟兵書を寫す
- 張孝基の義心
- 織田信長從者を誠む
- 泣聲を聞いて小兒を救ふ
- 李白詩人となる
- 平重盛從者を憐む

- 將軍ワシントン
- 中江藤樹の話
- 伊達政宗の話
- 倉谷鹿山の奮起
- 義家の兵學
- ガゼンチ天文を語る
- 徳川常陸之介の話
- 孝婦の話
- 眞田昌孝の節儉
- 甘藷先生の仁心
- 東照公一婦人を救ふ
- ワシントンの正直
- 荒木村重の友厚
- ホルトの話

少年修身はなし

文廼家主人編

加藤清正の談話

加藤清正が家來に申すには、予は今日裸體のま
放逐されても、三年たつ内にはきつと元の土

となるべし、何故なれば先づ浴舎に入つて水汲
人となり竈火を焚きて日々勉むれば、身体は暖
かなるべし、又他人の七荷汲む所を八荷づゝ汲
むときは、假令いかなる主人にても永い間には

- 吉浦爲助の勞苦
- 張禮の孝弟
- 脇屋義助の話
- アレキサンドルの話
- 曹仲象の重量を計る
- リンコルンの勉學
- 岡本嘉藏の除徳
- 酒井熊仙の話
- 村上英俊翁の話
- 白川樂翁の話
- 毛利英雲公の話
- 飯田忠彦先生の話
- 平田篤胤翁
- 水野和泉守
- 大田正道
- 桶正
- 阿波有
- 頼山陽
- 二宮尊徳
- 熊澤蕃山
- 新井白石
- 菅原白石
- 菅原真
- 僧徠懷先
- 物徠
- 青砥藤綱
- 毛利元就
- 酒井政親
- 新羅三郎の友愛
- 熊谷直實と敦盛
- 兒島高德の忠勇
- 上杉謙信の義心
- 織田信長の義舉
- 稲葉一徹の勇膽
- 秀吉の大度
- 近藤勘左衛門の諷諫
- 栗田左大臣の勤勉

目次終

修身 ば なら

衣服をくれるべし、又五六月も累ねたらば日
用の品を與へらるべし、かくなるときは先づ是
を貯へ、然る後、一の刀を買ひ能く馬を好める
主人に仕へ、能く其馬を飼養せば、必ず褒賞多
かるべし、是にていろく、買ひ整へて、名高き
家の僕となりて、身を立てるなりと、其の計略
は胸の中に有りて、語りけるが、かゝる志のあ
る人ゆゑ、尾張の中村の鍛冶職の子でありなが
ら、終には數十萬石の城主となりたりといひま
すが、人は心掛が肝要なものであります、

蘭丸正直にして名刀を得たる話

少年 教 育

森蘭丸は織田信長の近臣にして、性質正直なる
を以て、大層寵愛をうけたりしが、或日蘭丸は
信長公の刀をとりて、主人の廁に行くに従ひた
り、蘭丸は廁の外に待ち居たりしが、退屈なり
しかば、刀の鞘に黒き漆を以て飾たる款紋數條
あるを悉皆かぞへ居たるを、信長は廁の窓より
之をのぞき見たるが、數日を経て信長は其刀を
多くの近臣に見せ、汝等此の刀の款紋の數を當
てたる者には、之を與ふべしと云ひければ、皆
多くは面白き事かなど、各々其數を云ひました
が、蘭丸は獨り黙つて居る故、信長其譯を問ひ

しなば身修

ければ、答へて言ふやう、私に其數を知り居る故、今知らざる真似して申すは君を欺くものであります故に、私は先刻より何とも申上ず。に居たる次第なりと云ひければ、信長は其正直なるに感じ、遂に其刀を蘭丸に與へたりと云ふ。林忠一名は信勝といひ、羅山とは其號なり、京都に生れたり、幼少の頃より學問を好み記憶力最もよき人なり、十八歳の時多くの生徒を集め程子の學を教授し居れり、時に藤原肅といへる大學者ありければ、之について學び學業大に進

○林羅山勉學の話

育教年少

みしかば、これより家康公に召出され、寵愛を蒙れり、明歴三年正月江戸大火にて羅山の邸も風下になり、既に危き有様なりしも、一室に居り餘念なく書を讀み居りしが、最早家に火移りし様なれば、門人と共に他の場所へ逃たるが、既にして家の焼失したる報知あり、羅山少しも心に掛ず、しばらくして書物藏に火移り残らず。焼け失せたる由を聞き、羅山は初て驚きたり、常に書物を勉強せし事、概ね此の如し、此人は徳川家より、東京の上野を賜りしかば、櫻の樹を數多植え、今日に至り、東京の人春風澹蕩の

候には、上野公園の花を賞せり、

○コロンブス亞米利加洲を發見する話

コロンブスは伊太利の生れにして、父は羊の毛を削ぐのを營業とし至つて貧賤なりしが、出來るたけ能くコロンブスを教育しましたが、コロンブスが住居の近邊の人々は、大抵航海を以て業とし、又時々危険を犯して所々に漂泊せしことなどを、自慢して居たり、依て自分も亦性情自然と其事に慣れて、學校に有るときも、能く地理學を勉強せり、かくて十四歳のとき舟子となり、小舟に乗て海に浮び、時として暴風の爲

めに困難を極めたりしが、種々の經驗に依て、地球は平坦なりや、又は地球上未だ發見せざる陸地はなきやとの疑を起し、毎日この事のみ考へ居たりしが、後年に至り、地球は平坦ならずして、必ず未だ發見せざる陸地ありと確定し、幾多の艱難を経て、ついに亞米利加洲を發見するに至りたりと云ふ、

○名取彦兵衛の熱心なる話

名取彦兵衛は甲府山田町の紙を商人なりしが、我が國で紙を製するは人力を多く費す而已ならず、粗末なる品を拵へることを心配し、遂に是

修身 ならば

を止めて製紙の改良を計り、其器械を造り出したし、試みるに不完全なる所多かりし、此の事業にて澤山に金を費したれども、之に屈せずして日夜思考して、二三度工夫をなし試みるに、未だよく出来ず、之が爲め大に家産を傾けり、他の人々は此有様を見て罵り笑ひたれば、家の人は何卒以前の商に復する事を勧めたれども撓まらず考へ居たり、是に依て親類なとも絶交するに至りしが、益々く勉勵して家産の倒るゝもいとはず、數年の工夫によりて終に精巧なる器械を發明し、我が國輸出の製紙をして外國人も第二位

少年 教育

に居るに至りしかば、官より之を嘉賞して金圓を下し賜はりしと云ふ、

○孟母三遷の教の話

孟子の母は賢明なる婦人にして、後の世まで美德ありと言れたり、孟子未だ幼年のとき、ある町に住居せしに、孟子は多くの兒童と商賣取引の遊をなせり、孟子の母が考ふるには、今かゝる土地に住するは子を教育するに宜しからずとて、今度は或寺院の傍に轉居したりける、然るに孟子は日々多くの兒童と共に、經を讀む眞似をし、或は墓を建て人を葬る眞似をしては、毎

少年教育

あり、或時裁判所に雇はれて役人の腰掛る臺を
作る時、大層骨を折て其板を丁寧に削りけれ
ば、朋友之を見て無益の手間を費すとて大に罵
り笑ひたりしが、健造が申すには、此板をかく
丁寧に削るは決して人の爲でなく、私の爲にす
るので私は一生涯のうちには、學問を勉強して
必ずこの臺に腰をかけるやうに成る身分となる
べしと云ふを聞き、他の仲間のもの生意氣な廣
言を吐くとも、何になれるものかと云つて、健
造の言を信せざりしが數年を歴て果して健造が
前に云ひし如くなりしと、是れ健造の性質よく

修身な

日遊び戯れり、そこで母は此の地も又我が兒を
教育すべき所にあらずとて、終に或る學校の傍
に轉宅したり、今度は孟子常に學生等が學問を
習ふを見て、之を學び日々遊戯にも更につま
らぬ事をなさざりければ、母は是に至りて大に
安心して、此地こそ我が兒を教育するに能き所
なりとて、孟子をこの學校に入れ學を修めしめ
たれば、孔子に次ぐ大學者となり、後世に稱賛
せらるゝに至れりと云ふ、
○大工健造勉勵して遂に其志を達したる話
常陸の國行方郡至造村の大工に健造と云へる者

修身 ば なら

物事を勉強して耻を知り、人物は重々しくよく
朋友に深切をつくし、其爲す事仕損ずることな
く、自然と人品もよくなり、遂に其土地の裁判
官に任せられしなり、

○日本武尊の武勇東夷を征服せし話

景行天皇四十年に東夷が多くそむきて、亂れ騷
しかりければ、天皇群臣に詔を下し、誰かよく
討ち平ぐる者ぞと、誰れも之に答へる者なく、
唯互に面を見居たる内に、日本武尊申上けるは
此の役は大碓の皇子に有るべしと云ふを聞き、
大碓の皇子はおそれて逃れたれば、日本武尊大

少年 教 育

に勇を奮つて再び言けるは、熊襲はもはや討ち
亡ほせしに、未だ數年ならずして、東夷がまた
そむくと、斯様なるありさまにては、幾年たつ
ても天下の治まる事難かるべし、願はくは臣自
ら參るべしと申上ければ、天皇大に歡び賜ひて
遣はしけり、かくて日本武尊は、東夷を討ち平
け、歸りて近江の膽吹山に至り、病氣になり身
體に痛み所が出来て、歩行も自由ならざれば、
杖にすがりて伊勢の能褒野に至り、病むこと烈
しくなりましたから、使を以て東夷を討ち平け
たる事を、天皇に申上りましたが、自分はずい

て蕩じました、
○牛董自ら其學問をなせし工夫を語る話
牛董は菓物の落つるを見て、地球に吸ひつく力
の有ることを悟り、此の道理に由て日月星運り
行くの理を悟れる、世に稀なる學者でありまし
たが、或人前に何等の工夫に由りて、斯の如き
大發明を爲せしやと問ひけるに、牛董答て常々
この事を思ひしに由て、得たりしなりと云ひま
した、他日自ら其の考察したる工夫を語りて、
予は常にこの事を吾の眼前に存留し暫くも失ふ
事なくして、其の事を朦朧として少しく明かな

ることを得るより次第に少しづゝ開け遂に久し
きに堪て、これより牛董が大名を得たりしこと
は、能く勤務忍耐による事を知るべきでありま
すが、牛董はこの一を誤爲して意倦むときは、
又他の一課をなし、斯の如く更換して精神を新
にし、氣力を養へりと云ふ、
○若林善内善孝の話
若林善内は佐渡の國雑太郡金丸本郷の人なるが
天性は慈悲深くして數年の間米及び金を出して
貧民に施し、能く父母に孝養を盡せり、また王
政維新の後に至りて寺院を合併し、或は廢する

しなば身修

事なごまゝありしかば、頑固なる人々は亂暴な
る舉動をもなさんとする有様なれば、善内は之
を聞きて大に心配し、何卒かゝる事のなきやう
にと晝夜心を痛めたり、依て自分の村は申すま
でもなく、他の村々にも走り行きいろく道理
を解き、百万鎮撫に盡力せしかば、さすが頑固の
人々も、善内の説諭に服して、皆悔悟の情をあ
らはし、終には葬禮のことなども、神葬式をも
ちゆる者澤山に出来たれば、國中の風俗も次第
に改良するやうになれり、此の評判處々に高く
なりたり、依て官よりは其の善行を嘉みし、木

育教年少

杯を賜れりと云ふ、
○惺々曉齋書を學びし話
惺々々々、曉齋は、幼年のとき死人の像を畫かんと欲
し、幾度か之を畫き見るに未だ不完全なりし、
一夜途にて乞丐の倒れ死したるを見付て、大に
喜び自ら刀を抜いて、其の首を切り取り、袍に
包みて急ぎ家に持ち歸り、やがて書齋に入り、
是を机の上に置き、熟ら視ること數日にして後
に筆を取て畫きしに、今度は其像眞に迫りけれ
ば、曉齋は手を拍て喜んで云ひけるは、是にて
日頃の望み始めて達したりと申されしが、後果

して有名なる畫家となれりと云ふ、
○綾部剛立熱心に星歴學を學ぶ話
人は幼年のときこれを學ぶは、壯年の時になり
てこれを行ふて、人々の益になることを計るべ
し、爰に綾部剛立といへる人ありしが、幼年の
頃より一心に星歴學を好みて勉強し、晝のうち
はいろいろ書物を熟覽して食する事を忘るゝこ
とたびくなり、又夜になれば天文をしらべて
見て、若しも書物と合ざることあるときは、悉
く其の書を捨て、外の書を索めて調べ、又は
器械をとりて、夜中露宿して種々考察を極めた

り、或日朋友とも多く來りて、君の如くにては
終には身體を害するゆる止めたまへと諫むれど
も、聞かずして遂には病氣となれり、依て親類
の者まで追々家に來り止め共なほ怠らざりし、
斯の如くの有様に、夜も碌々臥枕せざること
九年に至れり、故に種々の測檢すること露たが
ふことなきに至れりと云ふ、

○伊能忠敬私費を以て日本全國を
測量したる話

伊能忠敬は上總の國武射郡小堤村の人にして、
自ら節儉力作をして能く人を憐む、天明六年饑

修身 ば なら

謹つとのとき、金穀かねこくを出だして人に施ほして、人の困苦くわんくを救すひしなご、慈善じぜんのこと多おほかりけるが、後家ごか督とくを長男ちやうなんの景敬けいけいに譲ゆづりて、自分じぶんは江戸えどに來きたり、高橋たかはし東岡とうこうの門人もんじんとなり、數學すうがくを修おそめ能よく出來でるやうになり、幕府ばくふの許可きょかを得えて、私費しひを以もつて暇あそみ夷地方えいちほうを測量りやうりやうせんとす、第一だいいち着手てしゆに寛政くわんせい十二年じふにねん閏四月うるし四月十四日じふよっぴ發程はつていせり、以後いご十有八年じゆはちねんの間あひだ、種しゆ々の艱苦かんくを経て、遂つひに日本にっぽん全國ぜんこくの沿岸えんがん島々しままで盡こく測量りやうりやうし終はり、精密せいみつなる輿地圖よちずを編製へんせいし、幕府ばくふに上たてり、依よりて幕府ばくふよりは厚あつく之これを賞しょうされたりしが、文政ぶんせい四年よんねん九月くわつ四日よっぴ病氣びやうきにて没ぼつしました

少年 教 育

が、其時そのとき七十四歳しちじふしよさいなりし、明治めいじ十六年じふろくにねん一月いちがつ官くわんより贈位おんぎありて、其功業そのこうごうを不朽ふくしうに傳つたへらる、東京とうきやう芝公園しばこうえん丸山まるやまの巔いただきに數丈すうぢやうの銅柱どうちゆう鐵柵てつさくにて圍かこみたる彰功碑しやうこうひを建てられたり、
○雪舟畫せつしゆゑを好む話このはなし
小田雪舟おだせつしゆは備中びやくちゆうの國赤濱あかはまの人ひとにして、其父そのちちは雪舟せつしゆの十二三歳じふにさんさいのとき僧そうとなさんと、寶福寺ほうふくじの弟子でしとして、寺てらに來きたり弟子でしとなれども、佛經ぶつぎやうを讀よまずし或ある日ひ柱はしらに縛はりつけしが、夕刻ゆふごになりたるゆゑ、

索を解んと来て見れば、生きたる鼠ありて躍び
上らんとする故、驚きて近づき見れば、雪舟が
一日愁のあまり、滴下せし涙痕を足の拇にてゑ
がきたるものなれば、師は其妙なるに感服し、
遂に書を學ばしめたりければ、後に明の國に至
り師を求めたれども、師とするもの一人もなき
に至れり、故に處々の名勝を遊歴して、専ら天
然の景色を手本として描きたれば、明の人々も
之を賞賛せざるものなく、今になりても雪舟の
畫は世間に傳はれりと云ふ、

○大石良雄の頓智にて主君に良薬を

飲むる話

大石良雄嘗て淺野采女正の扈從たりし時、主君
采女正は病氣なれども薬を飲ことを嫌ひたり、
其故に主君の病氣は次第に重し故、大石良雄は
何卒して良薬を主人に飲ましめ、一日も早く全
快なさしめんと考へ居り、或日故に主君の意
に逆ひて云ひけるは、我が君には最早病み癒け
たるゆゑ、刀も自由には動くまじ、あら笑止千
萬やと罵りたり、采女正此言をき、大に怒り、
汝主君に向つて悪口雑言無禮ものめ切捨くれん
と、太刀引き抜き斬んと立上れば、良雄は一散

修身 ならば

に逃去りけるを、何處までも追かけられたるも
病氣の事ゆゑ、呼吸くるしくなりたりければ他
の家來を呼び水を求めたり、稍て前に良雄が密
に良薬を、其水中に入れ置たるものを飲みたれ
ば、其後は追々に主君采女正の病氣は快よくな
りしと云ふ、
昔時伊太利の或町にセルフと云ふ人ありしが、
或一人の男に對し不和を生じ、之を遺恨に思つ
て、何とかして此の恨を晴さんものと思ひ、或
日路に待伏して相手の人を不意に打ち、遂に眼

徳を以て怨を報せし話

少年 教育

をつきたれば相手の人は盲人となり、人並の商
賣も出来ざれば或寺に入つて僧となれり、數年
を経てセルフは大病に罹り、療治のため丁度右
の寺に入るべき都合となれり、併し考ふるに先
年彼の男を打ちたる事あれば、今度は必ず其意
趣返として、余を打ち眼をつく事必定なりと、
大に心配せしが、寺に入るに當て案に相違し、
此盲人寺中の上役に願ひ、自この病人の看病を
懇になし、遂に大病も全快に及びましたが、數
年前我手に掛て眼をつきし其人は、今日我病を
救ひし命の親となりたるを、病人の心に於て大

しなば身修

に感服せしと云ふ、

兼山國益を計る話

野山兼山は能く公益を計り、實用を専らにせる人なり、土佐の沿海一帯はもと蛤蜊を産せざりしが、兼山は江戸に用事ありて來り留ること數旬にして、最早用事も濟みたれば、先づ手紙にて故郷の人々に申し遣しけるは、私は近日歸國すべし、其時は蛤蜊を土産として諸君に贈るべしと、數多の人々は珍しきものなりと思ひ、兼山の歸りを頻りに待ち居たり、己にして先生の歸りに、舟が船戸灣に入りました故、人々約

育教年少

束の蛤蜊を受けんと思ひ、兼山に尋ねければ、兼山は今まさに諸君に贈るべしと云ひつゝ、舟人にいひつけ、悉皆の蛤蜊を灣中に投入せしかば、人々案に相違して其譯を問ひたり、兼山が答へて云へるやう、この如くせば、追々繁殖して、諸君のみでなく、諸君の子孫にも宜しかるべしと申されければ、人々其深慮に服せり、後果して土佐の海濱多く蛤蜊を産し、遂に名産となれりと云ふ、

平田篤胤と蒲生君平の話

蒲生君平と平田篤胤とは、大層親密なる朋友に

しなげ身修

して、能く學を修めたりしが、或日君平は篤胤
の家ごに参りたるを以て、篤胤は大に喜びたり、
稍まづて談はなは山陸さんりくのことを彼此たがひと談話だんわしけるとき、
篤胤あつたねが君平きんぺいに問とひたるやう、君きみは日夜にちや漢學かんがくを勉べん
強きやうせるが、君きみと私わがとの問柄もんがらは、學問がくもん上じやうで申まうせば
何なんと云うてよろしきやと尋ねたれば、君平きんぺいは不思ふし
議ぎに思おもひ、答こたへけるに君きみと私わがとは、斯かく親密しんみつな
る間まなれば、互たがひに隔へだなく、悪い事わるいことは諫いさめて正ただし
善よき事は勸すすめて爲なさしむるは、相互たがひの職分しやくぶんなり
と申まうされたりければ、篤胤あつたねの云いへるやう、若もし
其そのの言ことばの如ごとくなれば、君きみが頃日ころひ著あすところの山さん

少年教育

陸志りくしには、多くの誤謬ごごあれば、私わがが之これを直ただすべ
しと思おもふと云いひけるに、君平きんぺいは大おほに喜よろこんで、其その
の言ことばに従したがひたりといふ、

○ミルレル氏酒を止める話

ミルレル氏は、少年せうねんの時ときより酒さけを飲のむ事を止とめ
たりしが、嘗かつて云いへるに昔泥匠むかしじやうとなりし時とき、朋とも
友とものものと共に、酒さけを飲のみし事ことありしが、家いへに
歸かへり、書物しよぶつを見みるに、字畫じぶ躍あるが如ごとく、其そのの意い
味あじ茫ぼうとして知るべからざりけり、此この時とき思おもふに
かゝる情狀じやうじやうになるは、自みづから天命てんめいの尊位そんゐを降くだして
下流げりうの人ひとと伍ごするなりと、大おほに懼おそれて、此この時とき

修身 ならば

より再び酒を飲むまじと、志を定めたるなりしが、今日に至る迄、この禁戒を守ることを得たりと云けるが、ミルレル氏は此のとき飲酒の害あるを知つて之を止めざれば、有名の人とはならずしりしなるべし、抑も飲酒の事は、人を破るの磐石にして、少年の過る路徑に當る、極あしく極めて毒なり、人を悪に誘ふものなれば、常によく注意して、節飲すること出来ざれば、禁じ戒めて飲むことなき様致すべし、

桑原平七の慈善の話

桑原平七は豊後の國大分郡の生にして、少きと

少年 教育

きより節儉にして、能く家業を勉強し性質は正直なる上、學問を勉強し、年の末にいたりて餘りたる金あれば、貧窮のものにはせせり、平生懶惰にして家業を勉めざる人にして、困窮せる者に會すれば、懇に諭して、金を貸し本業につかしむるなど、懶惰ものを勵ませし事多くあり、又は懶惰無頼のものに漫に恩金を費し尙は貧困に陥るものあるときは、自分の行のいまた届かずして、其の人々を教へ導することの出来ざるを嘆息し、益々自分の行をつししみ、力を用ひて教へ導き諭せしゆゑ、其の人等もみな其

修身なばし

恩徳に感じ追々に能くなり、家業を勉めるやうになり、平七は又少年のものには修身學を説きて、善き行に勧めましたから、遂に官より賞金を賜れりと云ふ、

○勝海舟兵書を寫したる話

勝海舟は昔時長崎に至りて、西洋式の兵術を學び、軍艦に乗て實地の研究をなせしが、己にして江戸に歸りし後、も怠らず兵學を勉強せしが、其の頃は良書に乏しき時なりしが、或日書肆にいたり、新刊の兵書の良きものあるを見て其代價を問ふに、五十金なりと、海舟は何卒して買

少年教育

たく思へども、其頃はまた貧困なれば之を買ふ事協はざりし、是を残念に思ひ、漸く五十金を調へて、書肆に至れば、最早四谷大番町の與力某に賣渡せりと、依て直に四谷に至り、兵書を譲る事を頼めども、某は聞かざりし、依て夜にても宜しければ、借されよと云ふに、某は室外へ出すは困ると云ひければ、翌夜より某の家に至り、覽る事の許を得て、大に喜びたり、終に當時の住居は二里餘ありしも、一日も怠らず、其勉勵八卷の兵書を寫し了れりと云ふ、

○張孝基の義心ありし話

張孝基は許昌の人でありしが、朋友某に男の兒ありて、行の悪きこと多かりし、某病みて死なんとするとき、家財を盡く孝基に與へ、自分の子を放逐しました、孝基は其の與へられたる家財を大切に守り居たり、或日市街を通り掛るとき、彼の放逐されたる男が、敝衣を着て行く食を乞ふを見て、孝基は憐に思ひ、之を呼んで云ひけるは、汝は園に水をまくことを得るやと問ひけるに、彼の男答へて云へるやう、之を爲せば食を得ることならば、勞を辭せずと、孝基は彼の男を連れ歸りしが、日々怠ることなく勉

めしかば、又云へるやう汝は藏を守るべしと、彼の男は其の命の如く能く守りたり、斯の如くなれば、最早本善の性にかへりしなるべしとて彼の男の父より與へられたる、家財を悉皆男子に與へたれば、男子は益々行を慎みけるとぞ、
○織田信長從者を誠しむる話
織田信長一日從者五六人を供につれ、野遊に出掛たることありしが、途中にて一頭の小蛇が草の中より出づるを見て、信長が從者に云へるやう、汝等は此の蛇を見て、以て心に恐れ居るならんと云ふを、從者はさして大に笑ひながら、

吾等は千軍萬馬の間を駈廻りて、命を捨つるは
武士たる者の道なれば、何ぞかゝる小蛇を見て
恐れを抱くもの一人もこれなき筈なりと、肩怒
らして答へたり、信長は之を聞き不興氣に従者
に向ひて申されけるは、汝等は小なる故に恐る
べからず、大なれば恐るゝは大なる誤なり、此
の蛇は小なりといへども噛まれるれば、汝等命を
失ふべし、汝等他日戦争のとき、人の大小多少
を以て事を計るは、これ大なる過にして、斯の
如くなれば、後に至り悔ると雖も、詮なき禍を
蒙ることあるべしと誠めたり、

○泣聲を聞て小兒を救ふ話

攝津高槻の城主永井飛彈守が、或日家來をつれ
山へ遊獵に出掛たるに、山の麓に大なる樹あり
て、最も高き梢に頻りに小兒の泣聲しけるを聞
き不思議に考へて、この事を家來に問けるに、
其時一人の家來進み出で、答へけるは、これは
必ず驚が小兒を攫み來りし者なるべしと云ふを
聞きて、飛彈守は惻隱の情に堪ずして、家來に
申付け之を救はしむ、依て家來は銃をたづさへ
親鷺を追ひて樹の梢に登り見るに、果して小兒
の鷺巢の中に泣き居たるを見たる故、小兒をつ

れて飛彈守に示しけるに、飛彈守は是を見て大に喜び云へるやう、昔し雄略天皇は獵して善言を得、今予は獵して仁を得たりと、家につれり、其兒を養育したるに智勇人に優れたれば、飛彈守の寵愛一方ならず、生長して驚巢見と名つけ、遂に百五十石を與へたりと云ふ、

李白有名なる詩人となりし話

唐の李白といふ人は、始はよく書を讀けるが、次第に怠るやうになりましたが、或時用事ありて他行せしが、一人の老翁の斧を石にあて磨き居るを見て其故を問ひけるに、老翁答へて云

へるやう、これは針となさんとて磨けるなりと云ひければ、李白は大に老翁の耐忍力のあつきに感じて學問をなす、斯の如くして始終怠らざれば、遂によく達することを得べしと云ひ、さて家に歸り、それより以前とちがひ、日夜勉強せしかば、後には有名なる詩家となれりと云ふ

平重盛從者を憐む話

平重盛が或日其居間に居り、家來を呼べども返事する者あらざれば、から襖を開き見れば、兼て扈從の役を勤める一人眠り居れり、ふと傍を見れば、一通の手紙あり、何事ならんと開き見

修身 ならば

れば、在所の老母より多からぬ給金を分ち贈り
くれ忝なし、老の身の我等を助くるやさしき心
は、禮いふもなほ餘りありと、書き認めあるを
見て、重盛はその孝行なるに感じ、一包の金を
紙に巻き袂の中へ入れ置き、居間へ歸り頻りに
大聲にて呼びしゆる、扈従は目を醒しきたりし
に、重盛の仰には、汝はよく眠れりと云ひける
に、扈従は恐れ入りて頻りに詫び入り、手持不
沙汰の餘り手を袂に入れれば、こは如何に、大金
の包ありしゆる驚きける様子なれば、重盛は此
の金は天が汝の孝行なるにより與へたるものな

少年 教育

れば、汝母子は我が心に留て扶助すべしと言は
れたり、

將軍ワシントンの話

亞米利加合衆國の大統領ワシントンに一人の親
友ありて、此の人は數度の戰に軍功ありしが、
元來才氣にはちと乏しかりける、此時に當りよ
き明き役ありて、大統領より其役人を申付べき
筈なり、夫故數多の人々も大統領は是を用ゐる
事ならんと考へたり、然るに又此役に就かんと
する一人あり、この人は格別の才氣ありしが、
ワシントンとは議論も合す仲悪し、其故皆この

修身 ならば

人は其役に就く事は覺束なしと思ひける、此事件につき心配して、大統領に問ひしに、答へて云ひけるは、余が私の心を以て如何ともすべからず、余は合衆國の大統領なり、故に私の身を以ては初の人に役を申付たけれども、合衆國の大統領の身にては、これを如何ともすべからざるなりと云ひて、遂に後の人にこの役を申付たりと云ふ、

○中江藤樹よく門人を教へたる話

中江藤樹の朋友に、大野某といへる人ありて、某の子は了佐といひました、性質愚にして書

少年 教育

物を読むことを好まざりしが、某は了佐をして醫師となさしめんため、中江藤樹の處へ遣はしたり、然るに藤樹は其の志を氣の毒に思ひ、懇に大成論の読み方を幾度も教えました、よく覺えませんでした、藤樹の教へ方懇なるに感じて、其後は勉強いたしました、追々覺えるやうになりければ、先生も大に喜び、又他の書物を持ち來りて、日夜怠りなく前よりもは懇篤に教えたれば、數年の後書物もよく讀めるやうになり、醫術も追々に上手になり、後には有名なる醫師となりしと云ひますが、是れ實に

しなば身修

了佐が後年に至り勉強せしに依りますすけれ共、先生が多年の間よく怠りなく、教へ授けたるに因て、あります、

○伊達正宗不動明王に参詣せし話

伊達正宗が幼少の時、家來と共に或寺に参詣いたしたることにありけるが、其の門の前に立てる不動明王の像を見て、正宗は家來に問へるやうあの面体の猛悪なるは何者ぞ、實に忌々しき神なり、早く取りのけべしと言れたれば、從者は大に怪み答けるに、彼の神は面体は悪しき者なれども心はやさしくして、人々の災難を救ひ、

育教年少

幸福を與へるものなれば、決して勿体なきことは仰あるべからずと申上けるを、正宗は聞て、嗚呼汝等の申す如くなれば、余は大に誤を云ひしなり、人も斯の如く、大將たる者は、常にこの不動明王の如く、外面には威光ありて、心はやさしくありたき者にして、余は今日此の處に参詣して、圖らず人に君たるの術を得たり、これは實に不動明王の授けたる賜なりと云ひて、大に喜び、神に禮拜して家に歸れりといふ、

○倉谷鹿山奮發心を起す話

倉谷鹿山は奥州三春藩の歩卒でありしが、幼き

頃より學問を好み、書法を某氏について學び、大層上達いたしました。が、始め同藩の士に奥村某なるものありしが、或日其書を見て嘲りて云へるやう、汝の書き方は和流といつて、觀るに足らんものにして、こんな者を書く位ならば、始めより書せざる方がよかるべしと、罵りけるを聞き、鹿山は大に耻ぢ、それより大に奮發して、自分の家を出で、四方に參り、學文を修め、まして長崎に到り、書畫を清國人に學び、大層上手になりたれば、故郷に歸りたるに、藩主も鹿山の書畫を研究せし由を聞き、其の師とな

し、士林に列して祿百石を與へしかば、それより鹿山の名高くなり、遠近より教を受けに來る者數多ありて、此地の文藝大に開けたりしが、天保四年十二月十三日七十五歳にして、病んで没したりとぞ、

○義家鳥を見て伏兵を知りたる話

源義家は昔の名高き大將にして、陸奥の酋長安倍時頼を征伐し、前後十二年の久しき間苦戰艱難を致し、實地の戰爭には能く慣れて、其の時分には、誰も之に敵する程の者もなき有様なりしが、或日宇治殿に至り、頻りに戰爭の景況を

修身ばなし

物語りたるに人々皆感服し居たり、然るに襖越に、大江匡房と云へる人之をまゝ、私に評して云ふやう、義家は好男子なれども、惜いことに未だ兵法を知らずと申すを、義家の家來が聞て、義家に語りければ、義家は實に然りと云ひて、其より大江匡房について日夜兵法を學びたれば、寛治年中清原武平を討つに當りて、金澤の城を攻むるとき、城が稻田水澤を隔て居りしに、義家を引いて城に迫るとき、一群の雁が飛上りければ、義家は伏兵のあるを知りて、從者に命じて搜索せしに、果して伏兵ありたりと

少年教育

云ふ、

ガセンヂ天文を語る話

ガセンヂは佛蘭西の大學者なり、四歳のときよく書を讀み、追々成長するに及び、天文を見るを以て樂とせり、七歳のとき同じ年頃の子供兩人と或満月の夜山遊に行きけるに、折しも月は晝の如く、薄き浮雲風に吹かれて、月の邊を飛び、雲の間に月の走る如く、又月の前に雲が動くでとし、子供等は動くものは月か雲かと爭論をなし、皆々云るには、動く者は月なりと、ガセンヂは獨り動く者は雲にして、月も動かさ

しなば身修

るにはあらざれども、目に見へる程でなしと云ふに、子供等は其の道理を聞わけざりければ、ガセンデは工夫を運らし、大木のもとへ連行き其の枝の間より窺はしめしに、果して月は同じ枝の間に止りて動かず、實に走るものは雲なりければ、子供等もこの證據を見て、ガセンデの説に感服して閉口したりと云ふ、
○徳川常陸之介の話
徳川常陸之介が十四歳のとき、父に申されるやう、此度大坂城攻の軍に従はんとて、此の戦争は兒が初陣なれば、是非に先陣の隊に加はり、

育教年少

天時功名を表はし度と述べたるを父は聞て、汝は幼年の事なれば先陣に在ることはいと危し、思ひ止るべしとて許さざりけるが、元和元年五月八日常陸之介が城近く進みしとき、城中に火の燃え上るを見て、急ぎて陣所まで馳せ附きたれど、城は最早落ちて軍も終りたる後なれば、常陸之介は大に嘆息して涙をながし、父上は兒の願ひを聞き届け賜はずして、後陣に置きたれば、今日の軍に逢はず、誠に残り惜しき次第なりと恨みけるを、家來共は、若君には左ほと歎くにも及ばず、此の後の戦争に功名を表はし賜

修身 ば し

ふこと易しと云ひければ、常陸之介の云ふには
兒が十四歳の時が二度あるかと叱りけるとぞ、
承應年中備中の國窪屋郡三田村に孝婦あり、同
村の人久兵衛といふものに嫁ぐ、久兵衛に父あ
りて、其性質は無慈悲にして日々婦をむごく使
ひ、時としては鞭を以て撻ことあれども、孝婦
は少しも是に逆ふことなく、舅は年八十になり
歩行も自由ならざるを、能く介抱して少しも怠
ることなし、一夜婦熟睡のとき、舅の起きしを
知らざるを、舅は怒りて臼の中に溺せり、婦は

○孝婦頑舅を悔しめし話

少年 教 育

寤て之を知ると雖も、少しも面色に顯はさず、
自ら罪して舅の怒りの解くるを待て、後に臼を
洗ふ事なごあり、他のことは推して知るべし、
舅は此の如くなれども、終には之を悔悟するや
うになりたり、此時藩吏の村中を巡廻するを見
て、舅は出で、拜し、婦の孝養を語りければ、
巡吏即ち國主に上申せしかば、犬に孝婦の行を
嘉みし賞賜ありしといふ、
○眞田昌孝節儉なる話
眞田安房守昌孝は、天正年中に名高き大將と呼
ばれし人でありしが、性質節儉にして平生よく

人を憐みたり、此人常に佩刀の柄を纏ふにも粗
未なる木綿の打糸を以てせしかば、或人之を嘲
り笑ひたり、其とき安房守云へるやう、奢は人
間の悪徳なれば、もし之を慎まざれば、大にし
ては國を亡ぼし、小にしては以て家を滅ぼすべ
し、且つ人たるもの徒に美服を纏へばとて、心
が愚昧なれば何の役にも立ぬなるべし、刀劍も
之と同じく飾りばかり美麗にても、何の役にた
ぬものなり、先づ吾魂を見るべしとて、兩刀
を抜き示せば、王散る如き正宗の名刀なりけれ
ば、其人は大に耻ぢて返す言葉もなかりしと云

ふ、
青木昆陽嘗て嘆じて云へるには、罪ありて死刑
にあらざる者は之を島嶼に放つが、これは天然
の年を終るためなり、然るに諸島は五穀なく、
海産木實を以て食とするゆゑ、往々餓死する者
あるは免るゝこと出来ず、實に憐れむべき事な
り、穀類の外に之が代用をなす者は蕃薯に如く
ものなしと、そこで官に願つて、種子を薩摩よ
り取り寄せて、之を試みに植えたるに極めて能く
蕃術せり、是に於て蕃薯考といふ書物一卷を著

○甘藷先生の仁心なる話

しなば身修

して、其植附る仕方を出版し、種子を併せて之を諸島及び諸國に分ち植しめたれば、未だ數年ならずるに處として植ざる所なきに至れり、今に至つても上下之を便利とし、五穀實らずと雖も、人々遽に餓死せざるは、實に昆陽の恩惠なり、後世の人が其の墓門に表して、甘藷先生之墓といふは、誠に故ある事にして、君子と云はれる者は、仁を去ては名をなさんもの故、日夜仁に違ふことなく、能く人の爲になるべきことは、爲すやう注意すべし、

○東照公一婦人を救ふ話

育教年少

東照公が一日從者五六人と共に、野遊に出でたる途中にて、一婦人の小兒を脊負ふて泣き居たるを見て、其譯を尋ねたるに、婦人の云へるに、は、妾は昨夜誤て火を失せしかば、邑の役人が大層怒りて、妾を追放の刑に處したり、故に今斯の如く泣き居たるなりと答へければ、公大に憐れに思ひ、人たるもの好んで家を焼くものはなかるべし、邑の役人たるもの若し誤て我が家を燒きし者あれば、之を救ふべきこそ當然のことなり、然るに之を察せず、罪なき人を罪し、不幸の上不幸を加ふるは、不人情の甚しき者

なり、もし誤て火を失するをもつて罪ありとせ
ば、余と雖も城を焼きし事あるを以て、追放の
刑に處せらるべしと、從者をして其婦人を舊里
に送り返さしめて、大に邑の役人の不人情なる
を怒りて、之を罰せりと云ふ、

○ワシントンの正直なる話

ワシントンは亞米利加合衆國の人なり、幼年の
とき庭園に於て、大なる櫻の樹を斧を以て之を
切り、遂にその枝葉を枯すに至れり、數日を経
て父が此の處に至り家族のものに向ひ、余が愛
する櫻の樹を切りたる者は誰なるか明白に申す

べしと云へど、家族のもの皆知らずと答ふ、其
ときにワシントンは進み出で、正直に自分が切
りし由を申せし上にて其の罪をわびしゆゑ、父
も怒りを納めて云へるやう、汝の虚言せざるは
父が愛する櫻の樹に千倍せりとて、是よりワシ
ントンを愛すること、以前に倍せりと云ふ、

○荒木村重の朋友に厚き話

羽柴秀吉は荒木村重と大層親密なる朋友であり
ました、或時織田信長が讒言を信じて、村重
を殺さんといはしめましたから、村重は怖れて遂
に叛きました、其時に秀吉は信長に願つて村重

修身 ならば

の處に至り、親切に其叛を止めましたが、村重は遂に聞き入れません、其時村重の臣河原林越後が申しけるは、秀吉を殺して以て信長の力を殺がんと請ひければ、村重の答ふるには、汝の言は吾が利を計る爲なれども、秀吉とは朋友の間柄にして、彼は今我が家の亡びんとするを憐み、又我が害心なきを知りて、來りて諫むるのであるから、若し之を殺せば朋友の信義にそむくなり、遂に秀吉に酒を飲ましめ種々懇に取扱ひ、秀吉の歸る時には、手を携へて之を送り相互に別を惜みたりといふ、

少年 教育

○ホルト罪人を取扱ひし話
ホルトは英吉利の人にして、罪人を取扱ふ役人でありました、性質溫和にして、人を使ふに唯力を以て威すやうの事なく、罪人の食物をよくし、毎日定りたる仕事の外に餘計に働らく者へは、別段に其働きたけの賃錢を與へたり、或日罪人の内にて、主人の物を盗みし者ありしかば罪人を残らず呼び集め、諭して云ふには、汝等の内にて盗みし者あるべし、其盜賊の詮義行届くまでは、前々の如く汝等一同へ、臨時の褒美を與ふる事なし、故に汝等に於て詮義すべし、

修身 ならば

余は人を鞭つことを好まざるゆゑ、汝等のよきやうに之を罰すべしと云ひければ、罪人等も皆ホルトが云ふことの無理ならず、能く人々を取扱ひしに感服して、互に氣を付て盗みせし者を捕へて、銘々の取計ひにて、これを懲しめたれば、是に由て罪人等の内に物を盗み悪事を爲す者、次第に少くなりたりと云ふ、

○吉浦爲助師家の爲に勞苦したる話

爲助は安藝國廣島袋町の人にして、十一歳のとき同所本町三丁目の鍛冶細野和兵衛といふ者に就きて職業を習ひ、廿四歳のとき師匠の方に寄

少年 教育

宿して日夜勉めたり、それより三年を過て、和兵衛は男子二人女子四人を殘して病死したり、されば細野一家の困難一方ならず、爲助は師家の爲に大に心配し、和兵衛の長男和三郎は僅に十六なれば、自ら後見して巳が習ひし業を教へ養育に至らざる所なければ、其親類のもの之に感じて隣町に小家を買ひ、爲助に與へんとしたるに、爲助は之を辭して云へるやう、和三郎未だ幼年なれば、吾が身を安んずべき時ならずといひて、更に承引することなく、益々師家の爲に勞苦して盡力し、一家の者と親睦せしめたるゆ

修身 ば し

る、遠近のもの其の忠實なるに感せぬものはな
かりし程に至れりといふ、

○張禮の孝弟なる話

後漢の張禮は早く父をうしなひて、老母に事へ
けるが、或時凶年にて食物を得るに苦しむ、途
中にて數人の賊に出であひて、其の身を殺され
んとしたれば、張禮は頭を地につけて云へるや
う、家には老母ありて未だ朝飯を得ざれば、一
度家に歸り再び此の處に参りますから、何卒免
し下さるやうにと乞ひたり、賊は遂に放ち歸ら
しめたるが、其の弟の張孝は之を聞つけ、自ら

少年 教 育

賊の處に來り云るには、嚮に歸りたるは吾が兄
なり、もし兄を殺さんとならば、代りに吾を殺
すべしと云ひ居る内に、禮再び來りて申すに、
吾は本より殺さるゝことを許されたる故参りた
るなれば、何卒吾を殺して弟を殺すことを止め
よと云ひければ、さすが無慈悲なる賊共も、二
人の慈孝なるに感じたりと見え、皆殺さずして
去りたりといふ、

○脇屋義助の話

脇屋義助は、新田義貞の弟でありますが、其兄
の義貞は北條高時を討せんことを相謀りました

が、其とき高時は兵食を取り立て、又は金錢を
新田よりも取らんとして、吏卒を遣して催促し
ましたから、義貞は大に怒りて、其の吏を斬り
首を梟しました、此の有様を見て、高時は怒り
て兵卒を引きつれ、新田氏を討せんとする様子
なれば、新田氏の人々等は會議して、之を防ぐ
用意なさんといろく相談中、或人は利根川を
拒がむ、或は越後に行て宗族に因らむなど、評
議決せざりしを、義助進て云るには、二つの者
よき計略にあらず、坐して強敵を待ち、情見は
れ形屈するときは我兵敗るゝこと必せり、其よ

り鎌倉を攻める方都合よかるべしと云ければ、
人々みな此の言を最も考へ、その計略に従ひ
しかば、遂に鎌倉を攻て之に克つたりと云ふ、

○アレキサンドルの母に事ふる話

昔時アレキサンドルの母は性質姦しくして、
順ならざれども、王は常に逆はず、能く孝養を
盡したり、或時王が戦争に行きしときも、其の
敵地より分捕の品物を母の許へ贈り、其時の手
紙に、留守中國の政事は大臣へ任せ、母には彼
此と世話し給ふなど云ひ遣しけるに、母よりの
返書はさびしき文言にて、到底大王の意に順ふ

様子あらざれども、王はよく堪忍して怒りの色
を顯さざりける、然るに母は慢心ますく増長
して國家の大害を爲さんとしける故、王は大に
心配したる時に、大臣より王へ書面を上りて、
母の事につき痛く訴へけるに、大王は其書面を
見て、更に驚く氣色もなく、大臣は朕が心を知
らざるなり、斯る書面を何程贈るとも、母の涙
の一滴を灌げば、其の字を消して反古とするこ
とが出来ると申されたりと云ふ、
孫權といふ人あり、或日一疋の大なる象を贈り

○曹冲象の重量を計る話

けるとき、其の主人曹公といへる者、その象の
重量を試みんとしたるに、如何にして爲すべき
や、其の方法なし、そこで數多の家來を呼び集
め、これを量るの方法は如何と問ひたるに、多
くの家來互に面を見合すのみにして、之に答へ
る者一人もあらざりし、其のとき曹冲といへる
未だ五歳なる一人の小兒、進み來り云へるやう、
象を大なる船に乗せ、之を水の上に浮べ、水面
の船に達するを待ち、其所に墨にて點をつけ、
更に他物を象に換えて船に載せ、再び之を水に
浮べ、水が最初つけたる黒き點の面に至るを待

ちて止め、然る後に、その品物の重量を計るべし、この重量こそ即ち君が知らんと思ふ所の象の重量なりと申されたれば、其の所に居たる人々も舌をまきて、曹冲の頓智に感服したりといふ、

○リンコルン勉學の話

リンコルンは幼き頃、ある金満家の家來となり、終日田甫を耕し、夜になれば、小屋の中に臥して、日中の疲れにも屈せず、夜明まで書を読みたりし事あり、或夜風はけしかりしとき、主人が夜中に厠に行んとしたるに、草小屋の内に燈

火のあるを見て、さては燈火を消さずして臥したるならん、此の風の強さに無用心なることなりと云ひながら、到りて見れば、何んぞ圖らんリンコルンは、一心に燈火に向ひて、一卷の書を手にして、読み居たりけるに、主人も大に其の勉強なるに感服したりと、リンコルンの少時の貧困は此の如き有様なれば、學校に行きて、師に就きて學ぶといふ學資もなかりしが、自修の志が大層有りしゆゑ、些細の光陰をもむたに費すことはなさず、只管勉強して政治法律經濟などの諸學科を學び、後遂に大統領となるに至

修身 ならば

れりと云ふ、
○岡本嘉藏陰徳を施したる話
岡本嘉藏は備中の國哲多郡長屋村の人にして、
大工を職業とし、家は貧しくありしが、性質慈
善の事を好みける、其長屋村と蟹村との境に岩
石堀立の難所ありて、人馬の往來も自由ならざ
りけるを、嘉藏は何卒して、之を切り開き、衆
人の爲にこの艱苦を救はんとして、職餘暇
には、之に従事し、自分獨力にて爲し、毫も他
人の助金を仰がずして盡力せり、然れば明治三
年三月此の事を始めてより、同五年に至るまで

少年 教育

勉強せしかば、凡四五十間の斷岸絶壁、或は水
底不測の深淵を開鑿して、容易に人馬の往來に
便利ならしめければ、これに依りて、上にもそ
の善き行を賞されて、厚き賜ありしと云ふ、
○酒井熊仙の話
徳川將軍が江戸城に居りしとき、殿中に千羽鶴
を畫きたる襖あり、數多の役人が試みに雄と雌
とを分んと、幾度も之を算へたれども、如何に
も鶴の數多きが故に、明に之を算へることが出
來ざりけり、其のとき熊仙といふ兒童出來り、
私が算へて見るべしとて、襖を倒して仰向に伏

せ、兩方の手に黑白の碁石を握り、雄には黒石をのせ、雌には白石をのせて、残らず載せ了りて、後に其石を搔き集め、黒と白との石を算へ分ちて、何の苦もなく、鶴の雌雄を分たりければ、一坐のもの皆舌をまきて、熊仙の頓智に感服したりと云ふ、

村上英俊翁の話

村上英俊翁は下野の人なり、其父嘗て遺訓して曰く、汝苟くも世に志を立んと欲せば、伎倆千萬人の上に超越せよと、乃ち英俊の名を以てす、翁此言を服膺し、少にして漢學を修め、早く一

器を成す、後ち天下の形勢變革せんとするの兆あり、茲に蘭學に志し、天保元年津山藩の醫字田川熔菴に就き、蘭學を攻習するに、眼界を一新し、恍として別世界に入るの思ひあり、而して其蘭書攻習中に「ベルセス」と云へる書あることを知り、頻りに之を得て一讀せんと欲するも、亦た當時蘭書に乏しきが故に、之を得ること能はず、翁大に之を憾みと爲す、偶々佐久間象山に遇ひ、談「ベルセス」の事に及びしに、象山「ベルセス」の佛書を藏す、茲に於て之を借り讀むことに決す、當時蘭學に通ずる人ありと雖も、佛書

修身 ならば

を讀み得る人甚た少なし、之を以て翁先づ字書と佛蘭西文典とを對照して、大略佛文の法を考へ、更に之を手帖に寫す、此間半年餘の日子を消費し、斯くて後「ベルセス」を讀むことを得たりと云ふ、師授に依らずして、彼の如く深遠緻密なる佛書を讀み得たる所以のものは、抑も亦た翁が剛毅不撓の氣象あるに由らずんばあらざるなり、翁是れより頻りに佛書を讀み大に造詣する所あり、是れより我國人にして、佛學を攻習する者、漸く多きに及びし所以のものは、實に翁が卒先して、我國に佛學を開き始めたるに

少年 教育

由れりとす、嘉永四年三語便覽を著し、安政二年五方通語を著し、同四年佛蘭西詞林を譯し、此書を幕府に献ず、後ち開成所教授に任じ、外國文書掛を兼ね、日佛交際上の文書は皆な翁の手に係らざるはなかりき、明治の初年召されて外國議定官に任ず、後ち病に罹りて本官を辭す、然れども翁の碩學なるは政府の優待せざるを得ざる所なり、之を以て翁を學士會院に列せしむ、同十八年翁が我國に佛學を開始せし功勞多きを、遠く佛國に聞ゆ、乃ち佛國政府は其功勳を賞して「オールド、ナショナル、ド、ラ、レシヨン、ドニユール」勳

修身 ならば

章を翁に贈る、是れ誠に翁の一大名譽と謂ふべきなり、

○白川樂翁少將の話

白川樂翁少將は田安家より、白河の久松家を嗣ぎたりしが、折しも白河にては、藩用乏しく、如何ともなし難きを悟りて、毎日の膳部を見ては、かゝる粗食は食まじと叱り、又昵近の者の衣服を指しては、がやうの粗服は着けまじと叱る、家老共打集りて、殿の奢侈とても諫めんやうなし、已れ等が努めて無益なる藩用を省かんより外なしと一同に心を入れて、節儉せん事を

少年 教育

請ひしかば、樂翁少將汝等は斯くあるべし、只々節儉は上より強るも詮なしと思ひし故心にもなき行ひしたりと打笑ひて、之より上下一致に節儉をなし、藩用も忽ち裕かになりし、樂翁少將の嗣君は其初め父の志に似けなく、稍々奢りの兆ありて、衣食などの好み多きよしを聞き、或る時對面せんとて招かれける、嗣君は何心なく參られしは朝の程なりしに、日午も過ぎて父君の對面なし、折柄奥の者が膳部持出でたるを見れば、あやしき鹽魚の一皿計り供へしを腹の減りたるまゝうまくと食べられし後に、父君

修身 ならば

立出で言はるゝやう、物に飽きては何事も足らぬ心地して、思はずも奢りの途に入やすし、今日の日膳部にて物ほしきをりは味ひよかりしならんと打笑はれしを、嗣君も深く悟りて、之より同じく節儉をば守られしとなん、

○毛利英雲公の話

英雲公は長門藩毛利重就公の事なり、藩の支封長府瑞泉侯匡廣君の第十六子にして、母を性善夫人と稱す、享保十年九月十日江戸日ヶ窪の邸に公を生む、公幼名岩年甫めて五歳のとき、父侯を失ふ哀毀成人の如し、左右之がために感動

少年 教育

す、享保乙卯其の兄師就君卒す、公即ち嗣ぎて長府侯となる、公始めの諱は元房といふ、是に至りて匡敬と改む、元文己未五位に叙し、甲斐守と稱す、寛延辛未觀光薨す、遺命して公を以て嗣と爲す、是に於て公入りて本藩を嗣ぎ、長防の國主となる、此の時名を重就と改め從四位下に叙し侍從に拜し大膳大夫と稱す、時に年二十七、壬申始めて國に就き、次年東觀す、是れより隔年朝覲して怠らず、明和丙戌幕府の命を奉じ、藩吏を遣はして木曾川の決潰せるを修む、庚寅洞春公(藩祖元就公)の二百年忌に方り、新に

修身 ば し

廟を建て尊號を上りて、仰徳大明神といふ、大に祭典を陳じ、藩臣をして詩歌を作りて之を頌せしむ、之より歳時享祀して怠るとなし、安永癸巳擢んでられて左近衛少將を兼ね、戊戌幕命に依り家臣を遣はして日光廟及び東叡王琳宮を修む、落成の日、公亦親から江戸より至りて、其山に登る、浚廟親筆の畫二幅を賜ふ、諸侯皆之を榮とす、天明壬寅、老を請ふて國を嗣侯に譲り、改めて式部大輔と稱し、江戸より歸りて防の搦摩に居る、是に於て甚た禮俗に拘らず、國風榮儀を消閑の樂みと爲し、優游年を終

少年 教 育

ふ、己酉六月の交病あり、秋に至りて困憊甚しく遂に薨す、實に寛政元年十月十七日なり、享年六十五、諡して英雲院といふ、萩の藩國山の東光禪寺に葬る、公人と爲り容儀閑麗識量明敏、政を爲す清簡善に循ふ流るゝが如し、其の大事を處するに至りては、剛決撓まず、獨見の明、確乎拔くべからず、公の初めて支藩より入りて本藩を嗣ぐや、藩政疲弊の極に達し、既に翌年の租税を收むるも國用尙は足らず、加ふるに積年の風雨水旱に依りて、田畝多く荒蕪し、且つ狡猾の徒、兼併して其利を獨占し、細民の困厄

修身 ならば

殆んど名状すべからざるものあり、公即ち儉素
自から率ひ、食膳を節し、自から濯衣を着け、
奇技淫巧の事を退け、また均田の法を行ひ、廣
狹を度り、肥瘠を考へ以て税率を定む、此の時
測度外の地を得ると夥しく、後之より得る所を
以て國用以外のものと爲し、總て之を蓄積した
りといふ、また堤を海濱に築きて鹽田を作り、
稻田を拓き農桑を勸め地方の政を盡し、知ると
して行はざるをなし、是に於て百姓殷富にして
藩の財政大に整ひ、倉稟充實す、公即ち定額外
の金を蓄積し、撫育方と稱する官を置きて、此

少年 教育

の蓄金を管理せしめ且つ撫育方に與ふるに、至
嚴至確の權を以てし、非常不慮の災時にあらざ
るよりは、藩主の命ありと雖も之を費すとを得
ざらしめたり、然れども此の蓄金はまた殖産資
本の如く、農民中地方を拓くがために之を借ら
んと欲するものあれば、則ち其人と業とを料り、
年賦償還低利を以て之を貸附るとを許す、之を
以て地方を拓くの大りに通せりといふべきなり、
公の殖産に銳意盡瘁せる斯の如し、然れども敢
て他事を忽せにせず、學館を起して大に學生を
養ひ、又武道を勵まして以て士氣を振作せり、

修身 ならば

時々士を會して平生習ふ所の文武を演せしめ、
自から臨視して之を獎勵す、其藩祖を作りて歳
時に享祀せるが如きも、亦た一藩の士心を固結
して、大に奮勵する所あらしめんが爲めなりと
いふ、故に士氣煥然として振ふ、公の政を爲す
や、明斷果敏事を處するに概ね自から畫策し臣
下をして之を奉行せしめ、其法制を立つるや、
又自から意を授け、侍臣をして之を筆記せしむ、
然れども大綱を執りて、細苛に流れず、繁冗に
陥らず、其箴言亦往々卓落豪宕にして、深く政
治家の體を得たるものありといふ、之を要する

少年 教育

に、公は眞に政治家の大技倆大識見を有するも
のなりといはざる可らず、何ぞや夫れ大に力を
伸さんとするものは、先づ其本を治む、本とは
何ぞや殖産致富の道是なり、故に古今東西の英
主皆殖産のそを忽せにせず、積成の勢成るに及
んで、之を用ひて天下を壓す、ヒートル大帝の
如き、フレデリツキ大王の如き、即ち是なり、
○飯田忠彦先生の話
飯田忠彦は、もとの氏を生田といひて、長州徳
山の藩士なり、幼きときより書を讀むことを好
み、稍長じて藩主の扈從と爲りしが、容貌端麗

しなば身修

眼清しく眉秀で女子にして見まほしき程なりけ
れば、主君の侍女某之をかいまみあらぬ思ひに
戀ひ焦れ、思ひの丈を玉章もていひよること度
々なれども、物がたき忠彦なれば、いつも無情
もてなしけり、然るに其頃忠彦の上役なる某と
いふもの、彼の侍女の姿麗しきに思ひを掛け、
或はふみもていひ寄り或はぢきとにかき口説
けども聞き入れず、偶々途上にて彼の侍女より
忠彦に贈る玉章を拾ひ取り、憤然として怒り女
の我頼を聽入れざるは忠彦あるが爲めなり、忠
彦たに除きたらむには、我戀必ずかなふべしと

育教年少

て、之を主君に讒し、遂に其職を退けたり、忠
彦心に思ふやう、余不幸にして姦臣の讒口にか
り、むじつの罪被りて職を解かれ、世の物笑
となりたり、イデこれより奮發して、今日の冤
を雪ぎ、名を後代に残さばやと、遂に國史編纂
の志を企てぬ、時に年十六歳なり、忠彦はそれ
より江戸に上り昌平黌に入りて炊夫となり、或
は寒風凜冽の晨に水を汲み米を磨ぎ、或は暑氣
赫灼の日に薪を負ひ籠に向ふ、其苦し言はん
方なけれども毫も屈することなく、少しの暇を
得る毎に書庫より書籍を貸り讀みもし抄もしす

修身 ば 身 修

ること幾年此の覺に居りて、朝夕執務の暇著述をなさむは、百歳の高齡に至るも、恐らくは覺束なきを悟り、其頃大和國の富家、其養子を求むるを幸にそれが贅婚となり、財貨のあるに任せ珍書奇籍を買ひ集め、又人を頼みて諸家の秘本を寫さしめ、數十年の久しき拮据勤勉して、終に野史の大半を成稿したれども、徳川氏の世かゝる書を公にせむことは、民間の人々には許されざりしかば、人の傳手にて有栖川宮家の用人となり、益々刻苦して、遂に全部百冊の名著述を爲し畢りしが、其書を公にすること能はず、

少年 教 育

却て徳川氏の嫌疑を被りて自殺す、始めて着手せしより成稿に至るまで大凡四十九年、忠彦が勉強と苦辛とは果して如何なりしや、吾人想像の及ばざる所なるべし、世或は其書粗漏多くして誤謬少なからざるを譏る、然れども一人の身を以て、毫も他人の力を假らず、兎に角かゝる大著述を完成せしは、他日我邦の文學史を編するもの大書特筆すべきことたり、而して其本を尋ぬれば一小人の讒慝によりて職を免せられたるに基因せり、彼の小人の行爲は惡むべきが如く愛すべきが如し、

しなば身修

平田篤胤翁は英才博學にして近世國學家中の一
大豪傑なりしことは何人も知る所なり、其件信
友に與ふるの書簡に曰く「こゝに小弟身の上の事
申候は果しもなき申す事ながら、絶窮の様子前
後をつゞめて此節の苦しみ先づ暮には當もなき
に春になりてあたり前に借金方を盡く斷り、と
ふやらしして年はとり候所たかで八人扶持ばかり
をこねまはし候事故、何として參るべきや其所
へ旦那方角火消故其火事場の出醫を申付られ是
も無人ゆへ也と目付が頼同様に申候ゆへ引込も

○平田篤胤翁の話

少年教育

ならずと受候所火事羽織なし夫のみならず醫者
は醫者たが藥箱の上おひなしといふ私の事、そ
こで大騒して苦しむ所に駿河より眞柱の料眞柱
は翁の著述なり一兩來る所がいまた年始に出ず
外はうつちやて置ても、本でも借る所へは行か
ねばならぬから、夫を以てまづ人の事(典物の意
なるべし)たるのしめを借出して着て、唯一日に
年始をつとめ、翌日もとの穴へ納めて、それで
火事羽織藥箱の外、おびを買ひ先づはつと息を
つくると去年門人の悪者が藏本板を事たる十兩の
尻が來て、板を先へ引取れんとするに、これに

修身 ならば

當惑どふしても先が聴かぬから同心を頼み、お
しふちに待せて六月まで安心にはなり候得共是
にも一兩ばかり尤も人に借りて利を出したり、
先づよいと思ふと、去年大煩の砌に事たる本共
元利ともにて十兩ばかりのもの、段々斷り申置
候得共、十四五ヶ月になる故、流れると云ふに
人を入れて、先しばしと云ても聞かず、そこで佩
物にて先利分半金のかたに入れておさめたり、
すると去年春下女が深切で元は予に聞せず(病中
なればなり)彼が服類を三兩半に事たるが流れる
と云て櫛の齒を引が如く事屋が来る(これは今以

少年 教育

てまづたましておし付置(所)が三月に近寄り、去
年三月事たる雛が流れると云て来る、是を流し
ては娘が泣くから、このあたりの苦勞いふはか
りなし、そこで虚病を構へて、例の火事羽織と
不斷着用羽織を入れて、一兩二朱半にて受出し
たれど、節句の日に子どもに着かへさずる事叶
はず、今始てふたんの盥にて、節句をさせ候外
へ出るなど云ひければ、おとなしくなり候二人
の子供が心内不憐さ野弟心内御察可被下候、所
へ和名抄の寫しが出来たと云て其料をよこせと
云ふやら、此所彼所二朱、一步の借は櫛の齒を

修身 ば し

引が如し、例の縞ちりの小袖一ツ入れし所漆ぬ
りの如くなりて、入湯にも行れぬ仕合羽織がな
いから内會も出來ず、此節の有様、億萬中の一
を申上候もかくの如く候也、夫れ故に屋代へも
塙へも本を借りに行き事は出來ず候也、此中に
て古史傳の著述は怠りなく相勤め申候、御憐み
可被下候、儲古人も貧を語るは、求むる事ある
に似たりとか申す事にて、他人には申難き事な
がら、心有て君には申候、夫れ其中にてよく其
學をするに先、ほめられんと云ふ弟の情にて、
中々以て一兩や二兩、三兩、四兩の目くされ金

少年 教 育

の合力を望むかやらに思召被下間敷、そこらの
いやしき心は、露斗りも無之ことは神と君とは、
いとよく知ろしめさむ、然らば此事を祈る心の
實は、いかに云ふ、迎も此分では取續がたく
中々に屋敷の入口邪魔になり候ゆゑ、暇を取て
浪人となり候て、却てよき術も出來べくと存候
也、是は首くしうと思ふ如何に、と相談する
類ひにて、しかせよと宣はぬ君なる事は知りな
がら、餘りぢれたさに、かくは思ひ付き候とな
り、何れ大行は細瑾を顧みかたき場も御坐候
御汲分可被下候ア、ア、といへり、其困窮艱難

は決して尋常の事にあらず、而して翁此の中に在りて勇進の氣毫しも撓まず、襪褌を着けて破れ机に向ひ虱を捫りながら、泰然として、古事記傳を草し、敢て怠ることなし、其志の堅き其氣の勇なる、千百万人中、蓋しまれに見る所なり、宜なり其本居氏と並び稱せられ、後世まで人をして、追慕欽尚して止まざらしむるや、此の書今猶ほ伴氏に藏せりと云ふ、

○水野和泉守の話

徳川有徳公の撰抜に因て、老職に擧られし水野和泉守は、當時英雄の聞え高かりし徳川無二の

忠臣と稱讚されし程なるが、惜むべし其性短慮にして瑣々たることに、近侍杯を叱咤すること常なるが、或る時殿中に昇らんとするに際し衣服を着せんと扈從岩崎小彌太なる者に命じて是が取扱を爲せしに、短慮の和泉守、小彌太の扱方の遅々したるに氣色を損せしにや、帶もて小彌太の額を痛く打ければ、小彌太は是を深く恨みしが、君臣義あるの道を重んじ、尙ほ和泉守の機嫌を繕ひ、甲斐しくも主命を果し、跡にてつらく思ふ様、縦令短慮の君と雖も武士の面部を打搦とは甚た其意を解せざる次第に

修身 ば なら

こそと心中窃に恨みを懐きしが、何思ひけん一
封の書を遺して下屋敷へ退きしが、やがて此事
和泉守の耳に入り今更後悔して、岩崎小彌太を
召し還さん事を老臣等に謀りし處、老臣の面々
も口を揃へて申ける様、君の御短慮今迄の如く
にては、家臣の中終には離心を生じ、容易なら
ざる珍事を起さんとするも亦た量られず、然り
而して岩崎小彌太の如き少壯にして剛毅の士は
誠に得難きものと申すなり、彼れ元來果斷に穎
敏なるものなれば、一旦心を決して退去するか
らは、何條再び之を呼び戻すべき手術あるべか

少年 教 育

らずと異口同音に和泉守に向ひ、諷諫するのみ
にて誰とて小彌太を召還すべきの策を奉る者一
人もなきゆゑ、日頃短氣の和泉守は怒氣勃々大
言して云く、汝老臣等猥りに無益の辯を費す勿
れ、吾れ一朝の怒りに乗じ良臣小彌太に耻辱を
加へたるは、其譯を悟る處あれば、偶々汝等に
謀るも其事能はず、去れば我に一計ありとて、
近習の者へ召喚状を持せ、小彌太の許へ遣しけ
る、其文に云く、汝不忠の岩崎主命に背き其罪輕
からず、依て切腹申付べくに付き速に歸邸すべ
しとありければ、岩崎小彌太も切腹とあれば詮

少年教育

資清心に其才智の秀でたるを感じけるが、斯る利發の兒童は平素其徳義を奨勵し置くこと肝要ならめと遠かに色を正して兒に向ひ、凡そ人間の世に處するは、正直こそ第一なり、汝も宜しく正直の二字を心中に服膺すべしと教諭しけるに、道灌畏まりて領掌しけるが、暫くありて次に、間なる屏風を携へ來りて父の前に立て、此屏風を御覽候へ、曲れるときは立つと雖も、直なるときは立つ事なし、是は如何なる故に候はん

才に驚きけるとなん、資清は愈々其秀

修身な

なして、從容として歸邸しければ、水野和泉守も小彌太の死を惜まざる其覺悟の善さに感じ却て之を賞し大祿を與へ顯職に擧られ、愈々忠臣一圖に精神を込め、大功を奏せしとかや、太田道灌の歳猶は幼少なるとき、其父資清驕る者久しからずと書したる一紙を與へけるに、道灌これを見て默然として、霎時打案じ居けるがやがて資清に向ひ其傍らに書き加へたき事あるよし申されたり、資清許しけるに、道灌筆を執りて「驕らずとも久しからず」と書き加へければ、

太田道灌の話

しなば身修

昔し楠正成南都東大寺に遊學しけるが、此の寺の巨鐘は聖武天皇の御願に依りて、天平年中に鑄たる物なりと言ひ傳へ、其丈一丈三尺六寸巢口九尺一寸三分天下無双の巨鐘なり、或る日鐘樓の下に諸人集ひて、種々世の物語りなしける折り、此鐘は天下第一の巨鐘なれば、如何なる力士と雖も、之を撞きて眞の音を出す能はざるべしと一人が言へば、又一人がそは勿論の事なり、唯た動かし得る人さへ、古來なしと言ひ傳へたり、願はくは搖り動かす人にて善ければ

楠正成の話

育教年少

見たき者なりといふを、正成傍に聞き居ていかにも之を撞んこと凡人の能すべきにあらざれども、此の儘にして搖り動かすは左まで珍しとすらに足らずと云ひければ、諸人みな異口同音に左らば今動かして見せ給へと云ひけり、正成その時答ふるやう、之を動かすは最と易き事にはあれど、頓には爲しがたし、明日午時此處に來て見給へ唯た凡庸の下僕をして動かして見せ申さんと云ひければ、人々皆そは興あることなりと、翌日を約して去りにけり、跡にて正成は一人の直實なる下僕を召び、汝明日卯の刻の頃よ

修身 ならば

り、此の巨鐘に指を當て力を用ゐず、絶間なく
之を推すべし、左すれば午の刻頃には此鐘動き
出づべきなりと言付けられければ、下僕は訝か
しきこととは思ひけるが、主命の事なれば辭み
難く、翌日の卯の刻より主人に教へられし通り
指もて之を推すこと幾千萬遍と云ふ數を知らず、
斯くて少しも搖き出すことの無ければ、怪しみ
ながら猶憚らず推しけるに巳の刻とも思ふころ、
龍頭さりと鳴出でたれば、僕は始めて奇異
の思ひを爲し、益々勉めて推しけるに、午の刻
に至りては、東西南北心のまゝに動かさる方も

少年 教育

あらず、此時約束の刻限なりとて、近傍の人々
集り來りけるが、此有様を見て大に驚き、抑も
君には如何なる術を以て斯く奇絶の事を爲し給
ふぞと舌を卷きて問ひ尋ねけるに、正成莞爾と
して笑ひ、こは術にては無し唯練習の巧みなり
と答へられけるとぞ、凡そ世間の少しく才智あ
る者が、才を飾り能を衒ふは、一般普通の常態
なり、然るに今楠公は其才を誇らず、其能を賣
らず、練習の一語を以て暗々裡に諸人を教誨す
るは甚だ味ひある答へと云ふべし、赤坂の苦戦
千破屋の籠城に節を守り義を立て、天下勤王の

修身 ば し

士の先驅を爲したるも謹儉恭遜、功を争ふこと
なく、满腔の熱血を湊川に灑ぎて、忠義武勇の
芳名を千載に流したる其偉業神算は既に此時に
見はれたりと云ふべし、

○阿波有道氏の話

阿波有道氏は小字豊太郎、棕園と號す、文政五年
十一月を以て加賀金澤に生る、父を多伸と云ひ
世々加賀國郷本多氏に仕ふ、氏幼にして穎悟漢
籍に通じ、兼て劍法弓術に達し、傍ら書畫詩歌
を能くし、又蘭學に志す、年甫めて十一才本
多氏の近侍となり、安政五年本多氏江戸に没す

少年 教 育

るに至る迄之に従ふ、時に故大村兵部大輔、當
時村田六藏と稱し江戸にあり、蘭學を以て惟を
下し徒に授く、氏其門に入り刻苦勉學大に得る
所あり、乃ち渾天儀を改造して、兒童が容易に
四時の變遷晝夜の長短、日月蝕等の理を了解せ
しむるに便す、又硝石の製法を試みて成蹟あり、
七年近侍を免し、後ち作事奉行となる、氏常に
實業を隆んにし、國益を圖るに志あり、是に於
て大に喜び以爲らく宿志伸ぶべしと、先づ水車
を架し且道路を修む、會々大政革新國事多端に
際し、半ばにして止みぬ、是より一日鯨志を讀

修身 ならば

み、捕鯨の大に國家に裨益あるを悟り、又春時
加能の沿海鯨兒の多く出沒するを見、其業を起
さん事を謀り、遍く四方に説くも人皆以て狂と
し、一人も敢て賛するなし、氏其時機尙未だ到
らざるを察し、更に心を教育に用ひ私塾を家庭
に開き、盛んに子弟を薰陶す、門に入るもの數
百人、今や文武官となり、代議となり、實業家と
なりたるもの甚た多し、明治元年明倫堂助教に
加はり、後藩掌に轉じ史生となる、五年藩を廢
し縣を置かるゝに當り、内田政風氏縣令となり
任に就く、氏乃ち説くに捕鯨の事を以てし、大

少年 教育

に其賛成を得たり、氏喜びに堪へず、躍然とし
て事に従ふ、時に齡既に領白に至れるも、志氣
豪爽壯者も當る可らず、遂に沿海を遍歴し漁人
に説くに、内外捕鯨の實例を挙げ、其鴻益ある
を証し、町嚙反覆するも、當時漁人の習慣鯨を
恐れ、神物となし、之を殺せば祟りありとして、
敢て其言を聽くものなし、獨り石川郡徳光村藤
井某織田某等其説に服したるを以て、明治六年
初めて業を徳光村に起す、會々同郡金石町に漁
夫與平なるものあり、亦た捕鯨に志すと聞き大
に喜び乃ち之を懇憑し、其方法を示し此業に従

しなば身修

はしむ、爰に於て一鯨を得たり、之を加賀沿海に捕鯨の嚙矢とす、尋て又一頭を得翌年又一頭を得、毎頭の價八百圓に下らず、沿海の漁人之をみて數百年の迷夢頓に一覺し、翻然として鯨の捕ふべきを知り、能美郡の日末に安宅に、石川郡の金石に、河北郡の向粟ヶ崎に、此業を起すもの陸續輩出し、爾來加賀沿海の捕鯨概して虚歳なし、氏初め各個聯接せる網を用ひたるを更めて一網毎に離散するの法を創意し、以て魚留に代ふ、是より捕獲の數を増すを得たり、是れ鯨の逃逸せんとするも、網其体を纏ふを以て、

育教年少

自由を得ざるに乗じモリを刺し捕ふるの装置にして、蓋し魚留なるものは、他方に之を用ふるも、加賀にありては、漸流急激にして、用ふるに堪へざるを以てなり、其意匠に富める此の如し、明治十四年第二回内國勸業博覽會に三等協賛賞を得、十六年水産博覽會に四等賞牌を得、第三回内國勸業博覽會に褒状を得たるもの豈に偶然ならんや、而して氏其宿志を伸べたるの故を以て、其利を專にするを肩しとせず、明治十七年以降教育に従事し、小學一等出仕、分課集成校豫課教授女子師範學校教諭農業講習所教授

修身 ば し

等に歴仕し、廿一年六十七歳に至りて罷む、氏
本邦文學方針智育に偏するを憂ひ、大に徳育体
育の必要を説き、修身往來体操往來を著す、其
初て小学校令の發布せらるゝや、氏其遺志を繼
ぎ、焦志卅餘年試製幾十回を経て始て一竈を按
出し名けて七万竈と云ふ、蓋し之を用ふれば薪
の費を省くこと三分の二、若し全國盡く之を用
ふるに至れば、一日金七万圓の多額を餘すべき
を以てなり、廿三年東京に至り博覽會を縦覽し、
尋て各地方を巡遊して頻りに捕鯨と七万竈との
利益あるを説きしが、其半途に於て病に罹り遂

少年 教 育

に没す、享年六十九歳なり、抑も世人教育を受
け、苟くも世に實業を起さんと欲せば、氏が熱
心の如くならざるべからず、精神一たび到れば
何事か成らざらん、の古語は氏に於て其欺かざる
を知るべし、

○頼山陽先生の話

頼山陽先生は安藝國竹原の人なり、安永九年に
生る、幼にして群童と其風采を異にし、天資佚
宕精力人に過る趣あり、六歳にして經書を通覽
し、七八歳の頃は日以て夜に次ぎ頻りに太平記
平家物語等を讀みて鶏鳴き夜の更るを知らずと

修身 ば し

云ふ、然らば則ち先生が尊王の志を養ひ、後年日本外史を著すに至るは實に此時に起因せりと謂ふべし、後ち年十八にして江戸に上り尾藤二州翁の門に入り苦學數年學力大に進む、文化十三年父春水翁没す、茲に於て先生歸郷し父の喪を吊ふ、後ち筑前豊後等の諸國を漫遊し長崎に赴き止まること二ヶ月餘にして郷里に歸り母を奉じて京阪地方の名所舊跡を訪ひ居宅を京都三本木に卜し水西莊と稱し仰ぎて叡岳を望み俯して鴨河に臨む晨夕詩を賦し文を作りて士氣の振はざるを諷し或は書を著はして以て尊王の大義

少年 教 育

を鼓舞す、夫の日本外史日本政記の如きは先生畢生の力を凝め、滿腔の赤心を注入されし大著述にして、慶應の末年徳川氏政權を奉還し、王政古に復りて明治維新の大業を見るに至りし所以のもの、抑も亦た先生の著はされし日本外史能く士人の大義名分のある所を知らしめ、武門の專權を抑へ、皇室の尊嚴を現はすの力ありしが故なり、其卓見なること豈に驚くべきにあらずや、天保三年九月没す、時に年五十三、明治十四年に至り今上皇帝陛下先生が尊王の志厚かりしを感せられ金百圓を祭資料として賜ふ、

修身 ば し

今や又特に贈位の廟議ありと聞く、嗚呼先生の

○二宮尊徳翁の話

光榮も亦た太た大なりと謂ふべし、
二宮尊徳翁は相摸國足柄上郡柏山村の人にて、
天明七年七月生る、翁五歳の時、酒匂川洪水の
爲めに、其堤破れて翁の家の田畑悉く水害を蒙
ること最も甚たしく、累代富豪の稱ありし翁の
家も、亦た是より貧困となるに至れり、後ち翁の
十四歳の時に、父利右衛門肺病に罹りて没せし
を以て家計は愈々困難となり、爲めに食物を得
ること易からざるに及び、茲に於て翁晝は山

少年 教 育

に行きて薪を樵り、夜は家に在りて繩を緡ひ鞋
を作りて之を賣り、辛くも母と二人の弟とを餓
しめざるを得たり、後ち酒匂川の堤を修繕する
事始まり、毎戸夫役を勤むる事となるに當り、
翁も出て其夫役に就きたりしも、少年にして何
分にも力足らざりしかば、晝は夫役に就き夜は
家に歸りて鞋を作り、之を出して其力の足らざ
るを補ひしゆゑ、人皆な翁の少年なるにも拘は
らず、其志の厚きに感じたりと云ふ、斯くて母
も亦た病に罹る、翁は日夜心を盡して看護せし
も、母は遂に没したるを以て其家を保つこと能

修身ばなし

はず、二人の弟を母の實家川窪氏に預け、翁は伯父二宮萬兵衛に養はる、元來萬兵衛は慈愛の心なく、殊に吝嗇なるが故に翁をして終日農事に使ふの外少しも翁に學問を修めしむるの念なし、然るに翁は餘暇を以て學問を爲さんと欲するの志切なれば、終日農事を採り、夜に及びて書を讀み居たりしに、萬兵衛は之を見て油が冗費なりといふて行燈を取上たり、依りて翁自ら酒匂川に沿ふ磧地を耕し菜種を作り其實を取りて之を油に搾り、其油を以て毎夜書を讀み居たり、萬兵衛は又怒りて曰く、汝書を讀みたり

少年教育

とて何の益かある、寧ろ鞋を作り繩を絢ふの益あるに如すと、茲に於て翁は詮方なく夜更るまで鞋を作り繩を絢ひ、萬兵衛の寐るに及びて、翁も亦た寐所に到り窃かに行燈を點し書を讀みて夜を明せしこと數年に亘れり、後ち翁小田原に行き服部家の僕となる、此家に三男あり、皆な能く書を讀む、翁暇あれば必ず其讀書の側に坐し傍聽して少しも倦むの状なし、此の如くするること二年間にして、四書五經を悉く暗記し、深く其文義に通ずるに至れり、茲に於て翁は主人に自己の素志を語り、暇を乞ふて我家に歸り

しなば身修

しに、屋根は荒れ壁は落ち、蜘蛛は家の内に縦
横に巢を掛けて、幾んど見るに堪へず、之を以
て翁自ら屋根を葺き壁を塗り、一人にて之に住
み、農事を勉強したりしが、家漸く富みて先祖
の業を恢復するに至る、翁毎に人に語りて曰く、
凡そ一家の富は我額上に汗を流すにあり、常に
我額上に汗を流して、之を乾かさざるが如く業
を勉めて怠ることなれば、一家を富すに何の
難きことか之あらんと、翁が家の後年富み榮ゆ
るに至るも、亦た其素ありと謂ふべし、而して
翁は博愛の志深く毎に貧民を恤むを以て樂みと

育教年少

爲す、或人嘗て翁に忠告して曰く、君今家を興
すに汲々とし、而して餘財なきの身なるにも拘
はらず、漫りに貧民を恤まば、焉んぞ能く家計
に餘裕あらしむるを得んやと、翁答へて曰く、
爾に出るものは爾に販ると、又徳孤ならざれば
必ず隣ありと、然らば則ち我れ餘財なき身を以
て貧民を恤むは、即ち我家を富裕ならしむる基
にあらざらんや、吾子幸に安んぜよと、翁の博
愛の心に深きこと此の如し、之を以て其家は益
々富み榮えて、全く先祖の業を挽回し得たりし
も亦た宜なるかな、翁夫れ此の如く經濟の事に

修身 げしな

長ず、之を以て諸國の大名より招かれて、其財
政を整へ、皆な能く其事緒に就かざるはなし、
著はす所の書は爲政鑑三卷富國方法書六十卷あ
り、是れ皆な舊幕府に提出して褒詞を得たり、
安政三年十月年七十一にして没す、一男一女あ
り、男尙徳家を嗣ぎ、女文は門弟富田高慶に配
す、尙徳は明治四年に没す、其男尊親家を嗣ぐ、
十年七月興復社を起し、盛んに天地の恩徳を講
明し其報徳を勸む、是れ實に翁の遺志なり、而
して此事叡聞に達し、特に宮内省より尊親に金
百圓高慶に金五十圓を賜はり又正七位に叙せら

少年 教 育

る、十三年高慶著す所の報徳記八卷報徳論二卷
を奉る叡感斜ならず、又厚く褒賞を賜ふと云ふ、
嗚呼翁の如きは初め艱難に處して而して稀世の
大業を爲す、是れ實踐實行にあらざれば能く此
所に至るを得べからず、亦た以て艱難は能く人
を珠にするの語虚ならず、亦た以て艱難は能く人
し、將た夫れ此翁ありて而して此子孫あり、翁
の名の炳焉として、日月と其光を争ふが如きの
觀あるも亦た宜ならずや、

熊澤蕃山翁の話

熊澤蕃山翁は備前國岡山の人にして、元和元年

修身 ば し

京都に生る、年十六にして芳烈公に仕へ、後ち五年にして江州桐原に退隠し、年廿二にして始めて朱註の四書を讀み、後ち中江藤樹に就き王陽明學を攻究す、然るに翁の家たる頗る貧にし、常に糟粕を以て飢を凌ぐ、何ぞ能く翁の學を給するの餘裕あらんや、亦た推して翁が修學の困苦なりしことを知るべし、當時翁に常に人に語りて曰く、我れ書を讀み經を講じ貧に處して晏如たり、功名富貴何ぞ我志を動かし得べけんやと、聞く者皆な其卓説に服すと云ふ、正保二年芳烈公特に使者を遣はし翁を招く、翁

少年 教 育

乃ち其招きに應じて備前に赴き、芳烈公に仕へ國政を掌り、政綱能く緒に就く、之を以て祿三千石を賜ふ、明曆二年致仕して京都に出づ、時に年三十七なり、當時侯伯貴紳より大夫士庶人に至るまで、翁の名を聞き、之を敬仰して弟子の禮を執る者甚た多し、是れ翁の學問言行能く一世に超越したる所ありしを以てなり、元祿四年新井白石翁の先考は上野國荒居より出て久留米侯に仕ふ、翁は明曆二年に生る、三歳にして能

○新井白石翁の話

修身 ならば

く字を書し、七歳の時初めて演劇を観家に歸りて之を語るに、一も忘るゝ所なく、十歳にして久留米侯の側に侍し祐筆を掌り、文事を理す、其敏活なること殆んど老成人の如し、衆皆を翁の技倆を賞す、延寶六年侯の家甚たしく衰ひ、又如何ともする能はず、是を以て翁其志を伸すべからざるを察し、木下順庵の門に入り、苦學怠ることなく、諸史百家に通ずるを得たり、後ち古河侯に仕へ、又加賀侯に薦められ、尋て徳川家宣公の儒官に任じ、寶永二年家宣の將軍となりに及びて、翁も亦た侍講に進み從五位下に

少年 教育

菅原道真公の話

叙し筑前守に任せらる、正徳元年朝鮮使節來朝す、翁乃ち其使節と應接して大に我國威の盛んなることを彼れに知らしむ、其著はす所の書は藩翰譜、讀史餘論、古史論、折焚柴の記等あり、皆な是れ畢世の精神を鍾めて、之を鎔鑄したるものと稱すべし、菅原道真公は是善卿第三の子、幼き時より祖父清公父是善なを傳來の學業をうけて儒道を學びたまへり、生得聰明の性質なりしが、文徳天皇の齊衡二年道真年十一の春、父の是善卿島田忠

修身 ば し

臣といふ人に道眞の才のほどを試みさせんと思ひて、こよひは春ながら月も晴れて梅もおもしろく咲たるに詩にても作りてあそびたまはんやと忠臣に申さるゝを聞て、道眞とりあへず月輝如晴雪梅花似照星可憐金鏡轉庭上王房馨と云ふ一首を作る、又其頃都良香といふ學者あり、道眞良香に從ひ遊學しけるに、貞觀十二年の春良香の家にて人々弓射ける所へ行あひければ、人々思ひけるは、道眞は儒家の子なれば、常に扉をどち闔を出す學問のみせられて、弓なご手にとりたる事はなくて本末も知りたまはじと思ひ

少年 教 育

て、試みに弓射させんやと申すに、道眞やがて弓場に立出で、弓矢をさしわけて引わたしたるかたち、養由基が射つきもかくやありければ思ふばかりに見えしが、姿のみならず放ちたる矢ひとつも的外れざりければ、良香をはじめ一座の人々奇異の思ひをぞなしにける、さて清和天皇の貞觀元年に十五歳にて元服せられ、同四年に文章生に擧られ下野權椽に任ず、同十四年年廿八の正月母伴氏身まかり、此母もよく歌をよみたり、道眞元服の夜よまれし歌に「久方の月のかつらも折ばかり家の風をもふかせてしかな」

修身 ならば

と、此月の桂を折るといふ事はもろこしの故事に
て、學問に上達して天子より召し出さるゝ事を
折桂といふなり、是は道眞の元服して學業を成
就し、菅原の家風をいよゝ世に廣くしたまへ
と行末をいはひながら教訓したるなり、道眞其
後ち年三十六の時、陽成天皇の天慶四年八月晦
日に父是善卿に後れり、是善卿今年六十九歳な
りし、此卿の著はされし書は家集十卷あり、又
文徳實錄十卷を都良香と共に撰み、又勅を奉じ
て貞觀格式を大江音人と共に撰みき、其後ち道
眞寛平四年に年四十八にて宇多帝の勅を奉じ類

少年 教育

聚國史二百卷を撰み、翌年遣唐使定めらるゝに
道眞を大使とし、紀長谷雄を副使とせんとおほ
しめしけれど、此時唐朝も末になりて、昭宗の
景國年中にて大亂の折なる故、此度の遣唐使は
止められき、然るに同年の十二月渤海國の使者
斐文籍といふもの來れり、此人道眞の作りし詩
を見て、白樂天の風骨ありとて稱美せり、寛平
七年三月廿四日延喜帝また東宮にておわしける
に、令旨を下されて曰く、唐土には一日
に百首の詩を作りたる人ありと、汝は才智なら
びなくして七歩の跡を繼げり、然らば一時の内

少年教育

道眞相並て政事を執行ふに付ては定めて軌轢せ
んことを思ひ侍れば、何れ一人を止められたら
んが宜かりぬべしとて、叡慮をめぐらし王ふに、
時平は大職冠九代の孫にして、昭宣公の一男た
る御后の兄上なれど、年齢も三十に足らず、其身の
才心の掟なほも右大臣道眞には及ぶべくもあら
ず、道眞は重代の執政にあらねど聖人の教を守
り賢を擧げ徳を貴べば執政の任にありとて、
兩皇の御前に道眞を召されて、以後は一人にし
て天下の政を執行ふべしと仰せ下されければ、
道眞大に驚きて頻りに辭し申せど、さらに許し

修身な

に十首の詩を作るべしとて題を賜はりしかば、
其日の酉の時より戌の初までに作りて奉り、又
次の年に同じく令旨をうけたまはりて、二時の
中に二十首作りて參らせければ、人々昔も今も
かゝる事なしとぞのしりしと云ふ、後ち權大
納言に任せられ右大將を兼らる、此時時平も大
納言に任せられて左大將を兼られ道眞と相並び
て政を執行ふ、此時時平の道眞公を讒せられし
起りは、泰昌三年正月三日延喜帝上皇の朱雀院
へ行幸ありて、帝と法皇と御物語のついでに密
々へ仰せ合さるゝには、當時左大將時平右大將

修身 ならば

王はざるほごに、左大臣時平公今日兩皇の道眞
を召されしことよのつねならざる氣色を見て座
を立て陣の座へ退ければ、道眞兩皇へ奏し王ひ
けるは、只今臣を召されしことを怪しみ思ふ人
々も侍るべければ詩の題を賜はるべしとて、春
生柳眼中といふ題をこひうけ、今日召の旨は此
事なり、各方此題にて詩を奉らるべしと申けれ
ば、時平ももとの座へかへり参りて詩の宴に連
なり、其日例祿の外に兩皇并に后宮よりも御衣
を道眞へさづけたまへり、是れにつけても時平
公の氣色は例に違ひてぞ見えける、さて此兩皇

少年 教 育

の仰せられしことは密々の儀なりけるに、何時
しか世に漏れて聞えければ、是より時平公無實
の讒言をかまへ道眞公を罪に落さんとぞ謀られ
ける、それに荷擔せし人々は光卿定國卿菅根朝
臣等なり、此人々共に道眞公を罪に落さんこそ
らる、帝は固より聰明におはして、常には道眞
公の諫めをも克く容れ玉ひし程の御事なりけれ
ど、御齡十七歳にてまた若くおはしまするに、
御后は時平公の妹なるによりて、内外より讒せ
られければ、其實否を糺さるゝに及ばず、昌泰
三年正月廿五日道眞公の右大臣の官職を停めて

少年教育

し申さゞりければ、法皇は世の中あぢきなく恨
 めしく御思召して、大庭の椋の木の下に立やす
 らひ玉ひて、夕日の山の端にかたむく頃空しく
 還御ならせ玉へり、道眞公は勅宣重くして男女
 の子二十三人ありし中に、男子四人は同じく四
 方へ流され、姫君は都のうちに止められ、幼き
 君達二人を具して都を出て筑紫へ赴かる、是よ
 り道眞公は不出門戸といふ詩を作りて何方へも
 立出でず、都府樓纔看五色観音寺只聽鐘聲と作
 りたり、此一聯は白樂天が遺愛寺鐘歌枕聽香爐
 峯雪撥簾看と作りしにも優りぬべしと、昔の博

修身なば

太宰權師に左遷せらるゝ由の宣旨下せり、道眞
 公は悲みに堪ずして、亭子院へ捧けし歌に「なか
 れ行くわか身もくつとなりぬとも君しからみと
 なりてとよめよ」と法皇此の歌を御覽じて御涙に
 むせばせ玉ひ、帝と申せども我子なり、行きて
 申さんになどか叶はざらんと御思召して、正月
 晦日十善の御足に泥土を踏せ玉ひ、上西門より
 豊樂院眞言院を打過ぎ、清凉殿に近付せ玉ひて
 斯くと申せと仰せられければ、菅根朝臣藏人頭
 にてありけるが、昔し殿上の庚申の夜の御遊に
 つらをたれまるらせたる恨ふかくて、此旨を奏

修身 ば なら

士どもは賞しあへり、公の作の諸文を菅家文章と名づけて一卷ありけるを、延喜二年正月の頃御こゝち例ならざりけるとき、草稿を箱の中に藏めて中納言長谷雄卿の許へ遣はし、其年の二月廿五日齡五十九にて終らせたまへり、斯りければ戸を太宰府に近き四堂のほとりに墓所を點してをさめんとしけるに、車忽ち途中に止まりて動かず、是によりて乃ち其所を占めて墓所とす、今の神廟の地是なり、延喜五年八月十九日安樂寺に初めて菅公の神殿を建られ、味酒の安行といひし人は是れを奉られしが、其後ち藤原仲

少年 教 育

冬相續て是れを奉行し、同九年に至りて作り終り、是れ菅公を初めて神と崇めまゐらせし時作りたる神殿なり、
○僧懷素の話
僧懷素は家の周圍に芭蕉を植え、其葉に字を書き習ふて以て一代の能筆家たる稱を博したり、是れ昔は今日の如く紙あるなく、竹を切りて之れを火に燻り、小刀を以て字を刻り、而して其刻り了れるものを、軟皮に編たるものなり、夫の中庸に文武の道收めて方冊にありと言ふを以て之を知るべきなり、嗟呼古人學問を修むるに

困難なりしこと、亦た深く思はざるべけんや、

○物徂徠先生と井村專齋翁の話

昔しは印行出版の事業幼稚なりしを以て、書籍の数は世に甚た少なりき、左れば物徂徠先生は通鑑を謄寫して之を讀み、井村專齋翁は四書を他より借受けて之を讀みたりと云ふ、今に當りて徐ろに古人の苦學を追懷する時は、誰か亦た潜然として涙を流さざる者あらんや、

○青砥藤網の話

青砥藤網は、北條時頼及び時宗に仕へたる人にして家財に富めるが、或夜滑川を渡るとき誤つ

て十錢を墜しましたから、從者に命じて五十錢にて炬火を買ひ、水を照して錢を探らせて遂に之を得ましたが、或る人が得るところ少く失ふところ多きを笑ひますと、藤網が申すには、十錢は少いけれども、失へば天下の貨を損ずるなり、五十錢は誰か得る所あるゆゑ、人に益するものにして、彼是六十錢の利益たと申されました、

○毛利元就の話

毛利元就十二歳のとき、從者數人をつれて嚴島の神廟に參詣して歸り途に、從者に向つて今日

しなば身修

は何を祈りしやと問ひしに、其内の一人が若君
が山陰山陽の太守とならんことを祈りましたと
答へけるに、其時元就の云ふには、汝等は予が
他日天下の太守たるを祈らざるやと申され、人
たるもの巳の願ふ事の万分一たに達することは
甚た稀なりと語り聞かせり、
酒井政親は徳川家康の臣でありましたが、新參
の士に神谷某なるものありしが、途中にて政親
に逢て禮をしたりしが、政親は知らずして通り
過ぎければ、他日神谷は政親を見ても禮せずし

酒井政親の話

少年教育

て、其舉動が倨り傲ぶりに居ましたが、此事を
聞て家康は神谷は失敬なやつじやから、祿を減
せんと云ひけるを、政親は加増んことを願ひま
したから、家康は怪んで之を問ひければ、政親
答へて云ふには、貴下の臣は私を見ると唯へい
くど頭を下るもの多きに、神谷の如きは獨り
倔強なること此の如ければ、人に優りたる士で
ありますと申上けるを聞て、神谷は直に政親に
詣つて、今までの無禮をわびました、後に功
がありましたから、歩卒の大將となりました、

新羅三郎友愛の話

修身 ば し

新羅三郎義光は源頼義の三男なり、元服を新羅
明神の社前に加ふ、故に新羅三郎と稱し又館の
三郎と稱す、兄義家より弓馬の術を傳へ源氏一
流の祖なり、甲斐信濃常陸の諸國に其子孫多し、
義光の兄八幡太郎義家東征して清原武衡と戦ひ
ける時、義光左兵衛尉となつて京師を宿衛して
ありけるが、兄義家の軍戦利あらずと聞き、往
て之を援はんと乞ふ許されず、乃ち官を辭して
陸奥に赴く、義家義光を見悦んで曰く、今日汝
を見る猶先大人を見るが如しと、既にして陸奥
平定しければ、義家に従つて京師に歸る、後ち

少年 教 育

刑部丞、常陸介、甲斐守に歴任し從五位上に叙
し刑部少輔に轉じ、大治二年卒す年七十二、義
光の友愛なる官を捨て、兄の難に赴く、眞に兄
弟の道を知らるものと云ふべし、或は難してい
はん彼君命を輕んじたりと、然れども彼の陸奥
に赴くや、只兄を援ふの故にあらす、又朝敵を征
服する所以なり、是を以て朝廷も之を咎め賜ふ
ことなく却て其官位を進めらる、世の兄弟たる
ものかくあらまほしきことにこそ、義光少ふし
て音律を好み、笙を豊原時元に受く、時元卒し
て其子時秋尙幼にして秘曲を傳ふるを得ず乃ち

しなげ身修

義光に授く、義光の陸奥に赴くに際し時秋家の秘曲を失はんことを惜み、義光の跡を追ふて足柄山に至る、夜恰も月明かなるに乗じ足柄山上松風に和して笙を吹き悉く其秘曲を傳ふ、時秋感泣して袂を別ち京師に歸る、世以て美談となす、

熊谷直實敦盛を獲る話

元暦元年頼朝の弟範頼義經をして木曾義仲を討たしむ、平氏間を得て西海より還つて攝津福原に城く、生田森を東門とし一の谷を西門とし、山を負ひ海に面し甚た堅固とす、範頼義經義仲

少年教育

を誅し兵を移して之を攻む、義盛別に兵を分ちて城後の間道より掩撃し三面並び攻む、宗盛乗輿を奉じて南海濱に走り舟に上る先を争ふて瀬でし者無數、時に經盛の小子大夫敦盛亦城を出る者遺る、城中會々其愛する所の横笛名小枝なる子經盛に傳へ、經盛又之を敦盛に傳へしもの、敦盛之を棄つるに忍びず返つて之を取ら、岸に達すれば舟既に纜を解きて波上に在り、乃ち馬を躍らし波を蹴つて進む、源軍追ふて斬獲の多からんを競ふ、義經の部將熊谷直實亦追て抵る、

修身 ば し

遙かに一騎に緑緘の鎧冑を着け繡鶴の素袍を負
ひ駿馬に跨つて波を破るを見る蓋し凡卒に非ざ
るなり、直實乃ち呼んで曰く、君は平軍の將に
非ずや何が故に敵を背にして奔る請ふ返つて共
に角せよと、敦盛聞て馬首を旋らして岸に上る、
直實邀へて馬上相組み共に馬より墜つ、直實敦
盛を伏し甲を脱すれば、粉黛泥齒容顔婉麗殆ん
ど女子の如く年齒僅かに成を超え子直家と相若
く、直實曰く君を誰とかなす、答へて曰く將にして武藏
子が名を云へど、直實曰く余は義經の將にして武藏
國の人熊谷次郎直實と、答へて曰く子余を獲よ

少年 教 育

後其名を知るを得んと、直實以爲らく我子少し
く創傷を受く然るに尙余憂をなす、若し此貴公
子を獲ば父母の悲哀夫れ將た如何況んや此弱年
の公子を殺すも我軍を強むるに足らず、釋して
之を放つも亦敵兵を強ふするに足らざるおやと
將に之を釋し去らしめんとす、願みれば追騎已
に我後に在り、因て謂けて曰く今や追ふ者彼の
如し余倫し釋すも君遂に免れじ、其他の手に死
せんよりは寧ろ我手に死せよ必ず厚く君を葬ら
んと遂に敵す、因て首を裏まんと欲し袍を解さ
一腰間錦囊の尺餘なる者を得緋けは則ち横笛な

修身 ならば

り、直實又嘆じて曰く、昨は城中笛を弄して夜に徹す城外數万の兵をして轉た斷腸に堪えざらしめし者豈此笛にあらざるなきを得んやと、遂に首と笛とを義經に献ず、是は此れ無官太夫平敦盛にして時に年十七、直實公子を殺せしより惻隱の情に堪えず鎧冑を脱して緇衣に更へ、名を蓮生と改め佛奴となりしと云ふ、

○兒島高德忠勇の話

高德は備後三郎と稱し和田備後守範長の子なり、長ずるに及んで武臣權を弄し皇室を凌辱方を慨し常に之を恢復せんと欲す、後醍醐帝の笠置

少年 教育

に逃れ給ふや之を救はんを欲し未だ事を舉るに至らず早く己に帝の西遷に會す、高德乃ち一族徒黨を會し謂て曰く今や武臣跋扈して皇威衰頽し至尊蒙塵の厄に陥り給ふ、人臣たる者何ぞ傍觀すべきの時ならんや、余將に義兵を舉げ帝を奪ひ奉り以て微忠を竭さんとす、事若し成らずんば戈を枕にして死あらんのみと、一族皆之を然りとす、乃ち兵を船坂山に勒し以て待つ、敵之を牒し道を轉じて山陰道に出づ、高德之を聞き馳せて杉坂に至る亦及ばずして衆離散す、車駕院の庄に達す警衛頗る嚴にして意を達し易か

修身 ばなし

らず、因て微意の在る處を陛下に通せんことを
希ひ尾して行在に至れば、守衛門を警めて路通
せず、既にして夜漸く深く衛士の篝火漸く微に
四境寂然として只軒聲の營中に轟くを聞くのみ、
乃ち微服密かに行在の庭前に至る、樞機堅く鎖
して亦如何ともするなし、殺氣骨に徹して凄絶
心腸断つて將に寸ならんとす、高德涙先づ下る
こと數行天を仰いで長太息して曰く嗚呼万乗の
尊を以て身を九重雲深處に安ずるを得ず、賊
類の手に警固を受け、西海の波濤に王躰を曝し
給ふ震襟の苦楚夫れ將た如何んと切齒扼腕佇立

少年 教育

之を久ふす、乃ち櫻樹を削り腰間墨斗を取出し
天一勿空勾踐（一）時非無范蠡（二）
と一聯十字を題し地に伏して幾度か行在の方を
拜し暗涙を呑んで去る、翌朝衛士之を見て解す
る能はず入つて帝に奏す、帝見て以爲らく天下
尙勤王の士あるかと心潜かに喜び給ふ、後帝の
隠岐を逃れて長年に船上山に依り京師に還幸せ
らるゝや、高德護衛京師に至り軍功甚た多し、
○上杉謙信（一）を送る話（二）
天文十六年甲斐の國主武田信玄村上義清を信濃
に攻めて之を破る、義清走りて越後の國主上杉

修身 ならば

謙信に依り之を復せんことを乞ふ、謙信之を諾し兵を出して川中島に戦ふ相持すること連年、時に信立北條氏康と難を構ふ、甲斐は山國海なきを以て常に鹽を相摸に仰ぐ、氏康國內に令して鹽を甲斐に輸ることを禁ず、甲斐の民大に苦しむ、謙信之を聞き書を裁して信立に贈つて曰く、聞く氏康鹽を以て貴國を苦しむと、嗚呼何ぞ陋劣語るに足らざるや、余の争ふ處は兵に在つて米鹽に非ず、今より鹽を我國に取れ敢て妨げずと、因て國內に令して價を平にして奇利を得るを禁ず、甲民爲に活くるを得たり、兩氏の

少年 教育

英雄たる人皆之を知る、其戦ふ所以の者亦私利に非ざることを人皆之を知る、當時戰國の世互に呑噬を肆にするの間に在つて謙信の如きは眞に義を知る者と謂ふべきなり、
織田信長の義舉並に納諫の語
信長尾張に起り今川義元を討ち勢漸く熾んなり、京に上つて皇室の頽廢して能く給するなきを見慨然資を献じて宮室を造營し供御を辨じ、是利氏以來の廢典を舉げ煥然として初めて見るべき者あるに至る、公幼にして放肆驕慢傳平手政秀輒諫むれども聽かず、政秀憂憤書を遺して死す、

修身 ば 身 修

信長悔悟益武事を勵み遂に天下を定む、侍臣等
媚をなして曰く政秀君の大志を察せず、
を早ふす何ぞ不明なるやと、公佛然色を作して
曰く言何ぞ妄なる余政秀の諫死なかりせば何ぞ
今日あるを得んや是れ皆政秀の賜なり、汝等躁
急を以て彼を目す地下の彼に對するの道に非ざ
るのみならず、徒に余をして追懐感々たらしむ
るのみと、信長性猜然も能く悟る處あり、是れ
其天下を得る所以なる歟、
○稻葉一徹勇膽の話
齋藤龍興の臣稻葉一徹其主の暗劣與に事を謀る

少年 教 育

に足らざるを以て欺を信長に納る、信長之を疑
ひ茗燕に托し茶室に引き其臣三人をして接伴の
間に之を刺さしめんとす、一徹室に入り悠然と
して壁間の一軸を見朗して吟誦曰く雲横秦嶺家
安在雪擁藍關馬不前と三人其意を問ふ、一徹分
解明晰説て典古に及ぶ、信長隔障之を聞き出で
一徹に謂て曰く余汝を以て一武骨漢と爲す、
圖らざりき其文學の此の如きを、今や疑心釋然
として氷解すと命じて三人をして懷を探り、
を出さしむ、一徹笑て曰く今日の事僕亦此ある
を知る聊か徒死せざらんを期すと、亦袖裏を探

しなば身修

りて一刀を出す、嗚呼一轍の命危きこと累卵の
如し、而して其能く全きを得る者文字あるが故
に非ずや、孔子曰く文事ある者は必ず武備あり
と、武備ある者亦文事なかるべからざるなり、
○秀吉の大度の話
光秀の信長を弑するや、秀吉毛利氏の高松城を
圍み未だ拔けず相持する累月、輝元秀吉の援兵
至ると聞き和を求む、秀吉之を許し將に締結せ
んとす、會京師の變報到る、秀吉大に驚き以爲
らく事遂に秘すべからずと使者に告ぐるに實を
以てし、且曰く事既に此の如し公等猶和せんと

育教年少

欲するか秀吉を討つ此時に如くはなし、宜しく
還つて之を議れど、使者復り告ぐ、輝元大に喜
び諸將を會し議す、皆曰く信長の死必ず大に敵
の軍氣を沮喪す此機に乗じて秀吉を撃たば彼が
頭を獲んこと易々たらんのみ期失ふべからずと、
獨り隆景之を不可として曰く信長の死何ぞ夫れ
秀吉に幸するに非ざるなきを知らんや、應仁以
降天下亂れて麻の如く天將に一豪傑を出して之
を統一せんとす、余秀吉を見るに此れ其人歟、
彼れ信長の喪に會し敢て秘せずして以て我に告
ぐ、其度量の轄大なる殆んど測度すべからず、

修身 ならば

今和半は成つて彼の變を幸とし戦はゞ理彼に在
り曲我に在り、必ずや彼れ殊死以て戦に臨まん
此の如くんば未だ容易に勝を期すべからざるな
り、如かず和を全ふして兵を収めんにはと、輝
元之を然りとし使を遣はして喪を吊し好を修む、
公の度量宏遠にして其心の晒然たる概ね斯の如
し、信長嘗て秀吉を西征將軍としして中國を討平
せしむ、且曰く功成らば皆汝の有に歸せん、秀
吉拜謝して曰く臣豈に微力を盡さゞらんや幸に
功成らば未だ賞を受けざる者に分てよ、臣は直
に九州に入り之を定めん願くは其一歳の入を賜

少年 教育

へよ以て兵艦糧食を備へ北朝鮮に移り之を征服
するを得ん、願くは臣に賜ふに朝鮮を以てせよ、
臣朝鮮の兵を用ひて更に明に入り四百餘州を席
捲し三國を擧げて君に隸せしめん、是れ臣の宿
志なりと、其大志驚くに堪えたり、後ち朝鮮を
伐ち八道を蹂躪せしが、不幸中途にして薨じ宿
志遂に成らず惜い哉、
○近藤勘左衛門諷諫の話
近藤勘左衛門は豊臣秀吉の侍臣なり、或時秀吉
公諸老臣を召し之に告て曰く、往昔北條時頼、
諸國を修行して天下の民情を察したりとて今に

しなば身修

御坐候私方へ出入仕る研屋あり、此者不身上故
と、勤左衛門答へてされ候こゝにおかしき咄
侯す、公曰く勤左衛門近頃珍らしき事はなきや
申し試みんと、一兩日を経へて秀吉公の御前に伺
を御聞入あるべきや、さりながら臣が存じ寄を
御諫めを御用ひなきに何とて私共が申上ること
左衛門に託しけるに、勤左衛門曰く諸老臣方の
にせん怒りければ、浅野大に之を憂ひ近藤勤
に窃に出立すべし重ねて諫むる者は我自ら手討
野彈正及び諸老臣諫むれども聞入れず、近き内
至つて人々之を賞美す、我も亦踏んとすと、浅

育教年少

福德の祈願にて鞍馬へ百日の日參し、百日に満
ちたる日に通夜せし處夜の丑の刻時分にも覺し
き時天狗現はれ出で、神寂びたる聲音にて、汝
信心怠らず參籠す、依て多門天の威徳を以て汝
日を追ふて福德を得べし、しかし汝是迄家業に
油斷して人の誂へたる刀劍もろくく研がず
延引して催促に遇へば急に研ぐゆる麁末にして
研も宜しからずとて自然と細工を頼む人も稀に
して家次第に衰微すと宣へり、汝明日より家業
を第一に勵むべし、我は其神勅の御使なり末世
の奇特に不測を見すべし、何なりとも望むべし

しなば身修

秀吉の明智能く勘左衛門の諷諫を察し直に之を
納るゝこと誠に大豪傑と云ふべし、近藤勘左衛
門の諷諫亦其妙を得たるものと云ふべし、

栗田左大臣勤勉の話

栗田左大臣在衡は中納言山陰の孫僧如無の子な
り、伯父但馬介有頼養つて嗣となす、延喜八年
大學に入り文選范史を試み錯誤を以て下第す、
十二年省試し尋で文章生となり、十七年出身し
伊豫備前の椽となり、明年對策登科し少内記藏
人となり其後累進す、天慶四年參議に任ず、村
上天皇の即位するや從三位に叙し權中納言に任

育教年少

す、尋で正三位に進み大納言に轉ず、天徳四年
禁裏出火し宮殿悉く燬く在衡を以て改造の事を
監しめらる、明年功を以て從二位に叙す、安和
二年尚齒會を栗田の山莊に設く會するもの皆朝
服を脱し直衣指貫を着す、世以て盛事となす、
太政大臣實賴和漢尚齒會の畫章を以て之れに贈
る、左大臣源高明讒を蒙り貶謫せらるゝに會し
在衡之を聞いて嘆惜す、家人喜んで曰く大臣闕あ
れは次は當に公なるべしと、在衡大に怒つて之
を逐ふ、既ににして師尹に代つて右大臣となる、
明年左大臣に轉ず、この冬病を以て致仕す、尋

修身 ば し

少年修身はなし終
 驚きしと云ふ、
 視れば則ち在衡なりければ、
 深靴を穿ち簞笠を着して朝参する者あり、之を
 朝参すること難かるべしと、其言の終らざるに
 て曰く今朝の風雪には流石の勤勉なる粟田公も
 一日風吹烈しかりし朝、殿上の人々相共に語つ
 あるや未だ嘗て一日も朝参を缺きしことなし、
 大臣と稱し又万里小路殿とも云ふ、在衡の職に
 で薨す年七十九、從一位を贈らる、世に粟田左

明治四十四年二月十日印刷
 明治四十四年二月十九日發行

(修身の巻)

不許
 複製

編輯者 鈴木源四郎
 東京市淺草區北元町十二番地
 發行者 大川錠吉
 東京市淺草區南元町廿六番地
 印刷者 大川屋印刷所
 同所 川崎清三
 印刷所 大川屋印刷所

發行所 聚榮堂 大川屋書店

東京市淺草區三好町七番地

(電話下谷一五七三番)

MADE IN JAPAN,

265
657

●少年修身ばなし 文の家主編 貳拾錢

●修身動物の巻 文の家主編 貳拾錢

●修身歴史の巻 文の家主編 貳拾錢

谷口政徳編 研山口書
鳳齋中書

少年武士道

四六判裝禎美本
紙數三百餘頁
全一冊

本書は教育勅語の主旨を奉載し且つ新教育令に基き編纂したるものにして其文章は平易を主とし三十餘頁の繪畫を挿入し少年諸子をして其事柄を了解し易からしむ故に家庭の讀本として有用なるは勿論實に修身の要具となすを得ば其利益は喋々を要せざるべし

